
ハーフエルフの皇太子～ただ一人のために～

ジョン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハーフェルフの皇太子（ただ一人のために）

【Nコード】

N2780N

【作者名】

ジョン

【あらすじ】

ハーフェルフの皇太子の別バージョンです。

基本的に内容は同じですが、ハーレムではありません。

ヒロインは一人だけです。

旅立ち（前書き）

スランプ気味の作者です・・・

小説って難しいなあ・・・

旅立ち

アルビオン サウスゴータ地方 ウエストウッド村

森の出口の前で少年と少女が見つめ合っていた

「本当に一緒に行かないの？」

そう言った男の後ろでくくった髪が、朝日を浴びて反射する。

少年の目の前に立つ少女は

「……うん」

「孤児院の子供達のことなら、領での生活を保障するし、それに君だって『外の世界を見たい』と言っていたじゃないか」

「……あなたに迷惑をかけられない」

「……迷惑じゃないよ」

「私は……ここでみんなと暮らします」

「そつか・・・」

二人の間には気まずい空気が流れる

「君の考えは分かった・・・その気持ちに嘘はないのだね？」

「・・・うん」

少年の前に立つ少女は迷いながらも頷く。

「・・・どうして君は泣いているんだ？」

少女は慌てて少年に背を向ける

「な、泣いてなんていません・・・」

急いで目元の涙を拭くがあふれ出る涙は止まらない。

「あ、あれ、おかしいよ・・・涙が止まらないよ」

「・・・」

「か、悲しくなんてないのに・・・どうして止まらないんだろ？」

少年に背を向けながら少女は言った。

少年はその背中にゆっくりと近づく。

不意に、少女は少年に後ろから抱きしめられた。

「・・・え、・・・えつと・・・」

「・・・大丈夫・・・」

少年は少女を抱きしめながら耳元で囁いた、

「・・・私といるとあなたに迷惑をかけてしまいます・・・」

「そんなことないよ」

「で、でも・・・私は・・・ハーフエ・・・うん!？」

少女は最後までしゃべることができなかった

少女の唇は少年のキスによってふさがれていた

「う・・・ふうん」

どれだけ時間が経っただろう

ゆっくり、少年は少女から離れる

「・・・どうして？私は・・・」

「それ以上言うと、またキスしちゃうよ」

「／／／／／／／／／／」

真っ赤になる少女

「これから、僕はトリスティンに行く」

「・・・」

「本当は、一緒に来てほしかったけど」

「ごめんなさい・・・」

「もう一生会えないわけじゃないんだから、そんな悲しい顔をしないで・・・」

テファ

「・・・うん」

先ほどと違って、笑顔を浮かべるテファ

「やっぱりテファは泣いた顔より笑った顔の方が可愛いね」

「も、もう！！からかわないでよ！！アレル！！」

「ははは、ごめんごめん」

先ほどとは違う明るくなった二人の顔

「アレル、私はこの村にいます」

笑顔でアレルに言うテファ

「うん、分かった」

けど、一生離す気はないからね」

テファを引き寄せアレルは言う

そして、

「テファ・・・行つてきます」

アレルはそう言って、森の出口の前にあらかじめ呼んでいた竜に乗って飛んで行った

「行つてらっしゃい、アレル」

テファはアレルの姿が見えなくなるまで手をふり続けた

テファはアレルの姿が見えなくなってしばらくして、森に戻ろうとした時

「きゃっ!!!」

風が吹き、テファがずっとかぶっていた帽子が飛んでしまった

風になびく長く美しい金髪

そして、人より少し長い尖った耳が見えた

旅立ち（後書き）

スランプから脱出してやる!!

感想・意見・誤字などがありましたら、どんどん書き込んでください。

最初の小説「ハーフェルフの皇太子」を書き続けるかは悩んでいます。

トリスティン魔法学院（前書き）

今日中に何話か投稿します。同じ話がしばらく続きます。

トリステイン魔法学院

「あれがトリステイン魔法学校か」

ウエストウッド村から風竜に乗ってアレルは直接トリステインに向かった

王都トリスタニアから馬で2時間ほどの距離にあるここ、トリステイン魔法学院

ここではトリステインの貴族の子息だけではなく、他国からの留学生もくる

特に今年はゲルマニアの大貴族ツエルプストー家とトリステインの大貴族ヴァリエール家の娘が入学する

外国の王族や大貴族の子息・令嬢もこの学院に在学しており、そのため些細なことが戦争の火種になる可能性も孕んでいる

周りには入学手続きをする貴族の子供達の乗る馬車と荷物で門の付近は大混雑している

貴族達は一人で2〜3台馬車を引き連れこの学院に入学してくる

大多数の貴族は見栄を張る

自分がどれだけ財のある貴族かを周りの者に見せつけるために、無

駄に多い荷物を持つてくる

そのあまりの人と荷物の多さにアレルは思わずため息をつく

「あそこの広場に降りてくれるかな」

「クル」

アレルが乗る竜が返事をし、徐々に高度を落とす

「おい、あれ」

一人の貴族が上空から降りてくる風竜に気がつく

先ほどまで騒がしかった貴族達が静かになった

風竜の背からアレルが降りてくる

貴族の子女は思わずため息をつきアレルを見つめた

長く伸びた銀髪をポニーテールにまとめ、大空のような青い瞳、見る者を魅了するその笑顔

貴族の子息は露骨に嫌そうな顔をする（一部顔を赤らめる男もいた）

青年はゆっくりと受付に向かった

「ゲルマニア侯爵家、アレル・ラ・フォン・ランカスターです」と受付の女性に言つと

「ご入学おめでとうございます。トリスティン魔法学院はあなたを歓迎します」

と緑色の長い髪とメガネをかけた女性が青年に笑顔で返事をする

「ああ、ありがとう」とアレルは笑顔で返す

メガネの女性の顔が真っ赤になった

「そ、それでは、学院長が呼びです。私についてきてください」
ちよつと噛んでしまいなからその女性は言う

「くすつ、ええ、わかりました」と言つてその女性について行くアレルの背中を貴族の子女は熱い眼差しを向けていた

反対に男は内心「美形死ね」「成り上がりが」「野蛮人が」「はあはあ」？などと陰口を叩いている

「ここが学院長室です」とその女性が言う

「案内ありがとうございます」とアレルもお礼を言う。

「い、いえ。貴族の方がそのように平民である私に・・・」

「そんなことはありませんよ。平民だから差別する必要があるのですか？」

「い、いえ・・・」

「平民であろうと亜人であろうと皆、生きているですから」

「はあ」

「失礼、あなたのお名前を伺ってもよろしいですか？」

「ロングビルです」

「ロングビルさん案内ありがとうございます。」

ああ、そうそう。ロングビルさん

「はい、何でしょう？」

「いえ、こう呼んだほうがいいかな？ マチルダ」とたん、ロングビル顔に動揺が浮かんた

「な、何のことでしょう」

「いえ、後でお話したいのでよろしいでしょうか？」

私の部屋にあとで来てくださいね」

「・・・わかりました」

「では、のちほど」

そう言って、アレルは学院長室に入って行った

マチルダ side

「は、なんなんだい、あいつは？」

マチルダは通路を歩きながら、独り言をつぶやいている

「なかなか、いい男だったけど、なんであたしの本当の名を知っているんだ？」

いや、それ以前にどこかであったことがあるような」

マチルダは歩きながらつぶやく

side out

「失礼します」とノックをし、アレルは学院長室に入った。

「おお、ようこそトリスティンにお越しく下さいました。ゲルマニアから長旅でお疲れのところ呼び出してしまい申し訳ない」

と、この学院の学院長であるオールド・オスマンが笑顔で返してくる。

「いえ。快適な旅でしたので問題ありません」

「そうでしょうな、先ほどはかなり目立っておりましてな、まさか風竜で来るとは」

「ええ、少し寄るところがあったので」

「ほう」

髭を撫でながらオスマンは思案する

「もしや、女性に逢っていたのかのう？」

なぜか鋭いオスマン

「さあ、どうでしょう。想像にお任せします」

はぐらかすアレル

「ほほほ、若いということは良いの、

わしの若い時も、美しい女性がたくさんいての……」

それからしばらく、オスマンが若い頃の女性関係について延々と聞かされることになるアレル。

「（長い）」

ここに呼ばれた理由はまさかオスマンの女性関係について聞かされることなのだろうかと考えながらも、表情は変えずにオスマンの話を聞き流し、適当に相槌を打っていた。

「・・・それでの、わしには何人か孫がいるんじやが、どうじや、ミスタ・アレル」

「へ？」

オスマンがアレルに自分の孫について説明し始める

「なかなか出来た子での、バツーなんじやが・・・」

「（おいおい、まさか・・・）」

「ミスタ・アレル・・・わしの孫と見合いせんかのう？」

真剣な顔でアレルに聞いてくるオスマン

「お断りします!-!」

「どうしてもかの？」

「はい!-!」

「一回逢うだけでも・・・」

「いやです」

「あ」

「絶対です」

「・・・・・・・・」

学院長室は気まずい空気が流れる・・・

「お話がそれだけなら、僕はこれで失礼します」

席を立って出て行こうとするアレル

「では、冗談はそれぐらいにしておこうかの」

「（絶対本気だったよこの爺）」

内心ではオスマンを非難しているがおとなしく席に座ったアレル

「いゝや、失礼、失礼。なゝに孫との見合いは気が向いたらでいいからの」

「（まだ言うかー！）それで、僕をここに呼んだ本当の理由は何なんですか？」

「うむ。ミスタ・ランカスター、いやこう呼んだ方がいいかな？

ゲルマニア第一皇位継承者 『天帝』のアレル」

「ええ、そうですよ」と笑顔で返すアレル

「ふうむ」長いひげをさわりながら

「なにか問題でも？」

「いや、あの『天帝』がそもそも他国の学院に通う理由がわからないのじゃよ

ゲルマニアでも学院があるじゃろ」

トリステイン以外の魔法学院も勿論ある

「簡単なことですよ。ゲルマニアでは私が王族であるという理由で近づく者がいるので他国に留学をしたのです。他国の学院であれば、私も自由に生活できますし」

「なるほどの」

「私がゲルマニア皇族であるということは伏せておいてくださいね。ばれるとやっかいなので」

現在、経済的な面でハルケギニア1の国であるゲルマニアの次期皇

帝候補のアレル

そんな、雲の上のような存在のアレルの正体がばれれば、学院は大パニックになる

そんなに身近に皇族が、しかも次期皇帝候補がいればその人物に取り入ろうとする人でいっぱいになる

アレルはそれが嫌で他国に留学したのだ

「約束しよう」

オスマンはアレルの正体を口外しないことを約束した

「それと、私自身も父上から命を受けていますので」

「ほう、それはいいたい・・・よろしければ教えてもらえんかの？」

アレルはいたずらっ子のような笑顔で

「なに、私にふさわしい女性を探して来るように言われましてね、ふふふ」と笑いながら言う

「ほう、トリスティンの女性を生涯の伴侶にということ・・・」

「ええ、そうです（本当はテファですが）」

「しかし、殿下の御目にかかる、女性がいるかどうか・・・」

とオスマンが思う理由は、アレルがとんでもないぐらい美形だからだ

その容姿から女に間違われることもある

「そうですか？私は自分自身が気に入った女性でしたら、貴族だろうと平民だろうと関係はないですし（テファは一応王族だよな）」

さらりと、とんでもない発言をしているアレルにオスマンは驚いていた

平民が、ましてや、貴族でないものが王家に嫁入りすることなど、このハルケギニアでは考えられないからだ。

「いまどき、貴族、平民だという理由で差別する時代はもう終わりですよ。

我々が着ている服や口にする食べ物を作っているのはいったい誰だと思っっているのですか？平民でしょう。我々王族や貴族は彼ら平民のように服を作ったり、食べ物を作ったりすることが出来ますか？そもそも『魔法を使えるから貴族』という定義は間違っているのですよ。

貴族から魔法をなくせば何が残りますか？

先祖より受け継がれた『誇り』そんなもので生きていけますか？

トリステインは弱国と言われるようになったのは、本来、平民を脅威から守る存在である貴族が腐敗し、私腹を肥やす存在になったためでしょう。

自分達は始祖ブリミルから魔法を授かったから、平民より上位の存在であるから、平民は貴族の奴隷・道具でしか見ない貴族達。

彼らに、平民をそのように扱う権利はないのですよ。

自分たちから変わろうとしない者に未来はありません。

勿論全ての貴族が変わると思いますせん。

今の世は、真の貴族は少ない。

貴族は平民から搾取するのではなく、平民を助ける代わりにその平

民から利益の一部を貰う。それこそが貴族としての理想だと僕は考えます。

「

と、貴族を批判するアレル

今ここにトリステインの貴族がいれば間違いなくアレルを非難するだろう

オスマンはアレルに少なからず、恐怖した

「・・・なるほど。ゲルマニアの考えは斬新ですな。

しかし、いくら学院であるといえど、ここはトリステイン。そのような発言は感心しません」

「まあ、あなたたちトリステインの人から見れば私なんて所詮成り上がりの国の者とししか見ないのでしょうが」

「いえ、そんなことは・・・」

「まっ、私のことは黙っていてくださいね。今の私はゲルマニア侯爵家のアレル・ラ・フォン・ランカスターですから」

皇太子であるアレルは、ハルケギニアでも有名人だ。

現ゲルマニア皇帝の息子で第一王位継承権を持つ立場であり、彼自身その容姿からゲルマニアでは貴族から平民まで人気のある人物で

あり、実力も『火』・『風』・『水』・『土』のスクウェアクラス
彼が設立した「天空」という騎士団は、ハルケギニア1有名である
その騎士団は貴族・平民に関係なく実力があれば誰でも入隊できる
その中には亜人や翼人もいる。一部噂ではエルフもいるらしい
そのトップにいるアレルは自身が騎士団を率いて戦うこともある
平民の演劇にはアレルを題材にした物語があったりするほどだ。

「まあ、大丈夫でしょう。ここはトリステイン。ゲルマニアで直接、
私と面識のあるものはいないでしょうしね」

「いや、パーティの時にあったことのある者だったらばれますぞ
と、オスマンはあきれながら言う

「ああ、そういえばそうですね」

と、今までそのことを考えていなかったようだ。アレルは少し天然
なところがあるようだ

「とにかく、これから三年間よろしくお願いします」

「ええ、こちらまでできる限りお手伝いします」

「では、失礼します」

と言って、アレルは学院長室から出て行った。

アレルが出て行ったあと、オスマンは

「はー、やれやれとんでもない生徒が今年は来たものじゃ」

アレルの入学関係の書類を見ながらそうつぶやく

「しかし、今年は王族が二人も身分を隠して入学してくるとは・・・
」といって、

オスマンはもう一枚の書類を見た。

名前の欄に『タバサ』と書かれた書類を見ながら今後の対策を考えていた。

トリスティン魔法学院（後書き）

連続投稿中

幼き頃の出会い（前書き）

連続投稿中・・・

幼き頃の出会い

「さて、私の部屋はどこだろう？」

手続きを済ませてすぐに、学院長室に行ったアレルには、自室がどこにあるか分からなかった

アレルは風竜で学院に来たので荷物は実家から学院に送ってもらっている

「きみ、少しいいかな」と、歩いていた黒髪のメイドに声をかけた

「はい、こういったご用件でしょう」

と振り返ったメイドはアレルの顔を見たたん固まった

「すまないが、部屋の場所が分からなくてね」

「ええと、お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「アレル・ラ・フォン・ランカスター」

「少々お待ちください」と言ってメイドは走ってどこかに行ってしまった。しばらくして、

「ミスタ・ランカスター様の部屋はあちらの男子寮の最上階の部屋になっております」

「そうなんだ。ありがとう」

「いつ、いえ、仕事ですから・・・」

普通貴族は平民にお礼なんてしないので、メイドはアレルに感謝されたことに驚いた

「ふふ、仕事熱心なんだね」と微笑むアレルにメイドは顔が真っ赤だ

「またなにか頼むことがあるかもしれないから、君の名前を覚えてくれないかな」

「シ、シエスタです・・・」うつむきながら言う

「シエスタだね。では僕もこれで失礼するよ。仕事がんばってね」

「し、失礼します」と言っ、ものすごい速さでシエスタは走って行ってしまった

「やれやれ」アレルは男子寮に向かった

場所：男子寮最上階

「さてと、この階の上か」とアレルは階段を上っていくと、階段を上がりきるとそこにはドアが一つしかなくドアの両脇に甲冑が二体扉を守るように立っていた。

「？」

ドアノブに手をかけようとすると、二体の甲冑が動き出した。侵入者対策の自立型のゴーレムのようだ。

「ふん」と行ってアレルはドアを開けようとするがゴーレムはアレルに剣で攻撃してきたが剣はアレルの目の前で弾かれた。

「やれやれ、学院長。遠見の魔法で見ているのでしょうか。早く部屋に入れてくれないでしょうか」

「ふおおおお、いや、すまんかったな。

君の実力を知りたくての」とゴーレムから学院長の声が聞こえてきた。

「はあ、まあいいですけど。もういいですか？」

「ああ、この階の部屋は特待生しか入れないようになっているからの」さらりと言う

「・・・特待生なんて聞いていませんよ」若干、アレルの声に怒りが混じってるような・・・

「この階を使うということは、それ相応の実力があるということじやぞ。

ミスタ・ランカスター、不満かね？」

「目立ちたくないとは自分は伝えたはずですが？」

「仕方ないじやろ。君の実力を隠したままだといろいろ学院生活で大変じやろうし、君の言う王族の義務もあるじやろうし。他の生徒が同じ階にいては、いろいろ面倒じやろ」

オスマン学院長が言っていることは当たっている。

この学院に来たのは生涯の伴侶を見つけるためでもあるし、王族の

義務

つまり、早く世継ぎをつくれということもある。学生のうちからそんなことを考えなくてはならないアレルは眉間にしわを寄せた。

「仕方ありませんね、この部屋でいいです」

「そうか、ではゴーレムに君を識別できるようにしておくから、安心して休みたまえ」

「ええ、そうさせてもらいます。来客が来る場合はどうするんですか？」

「何、扉の前にある紐を引くとベルが鳴り部屋の中にある鏡にその者の姿が映るようになっておるから」

「なるほど、わかりました」と言つて、部屋に入るアレル。

部屋の中は、一般の生徒より広く豪華な装飾がされた家具で統一されていた。中でも寝室にあるベットはかなり大きい・・・

「・・・・・・・・・・はあ」アレルの悩みは尽きない。

しばらくして、来客を知らせるベルが鳴り、鏡にロングビルが映ったので、扉のゴーレムに下がるように命じた。

少し、控えめのノック音がしたので

「どうぞ」

「・・・失礼します」と、ミス・ロングビルがアレルの部屋に入ってきた。

「やあ、さっきぶりだね」

「それでお話とは？」

ロングビルの目には明らかにアレルを警戒している

「そんなに警戒しなくてもいいんじゃない？」と、杖を出しながらアレルは言う

「くっ・・・」ロングビルも杖を素早くだす

「おっと、サイレントをかけるだけだよ」そう言って杖をふるう

「なんだったら、杖を預けようか？」と言いロングビルに杖を渡すメイジにとって杖がないということは、魔法を使うことができないということだ。

「・・・正気かい？」

「別に話をするだけだから問題ないでしょ。座ったら？」

ロングビルはため息をつきおとなしく椅子に座った。

「さて、これでようやく話ができるね」と笑顔で言いロングビルに紅茶を煎れた。

「別に毒なんて入ってないから」と言っ自分も紅茶を飲んだ。毒は入っていないようだ。ロングビルも紅茶を飲んだ。

「さて、改めて久しぶりマチルダ」と笑顔で言う

「・・・私は会った記憶がないのだけどね」

「もうずいぶん前のことだしね。最後に会ったのは母さんと一緒にサウスゴータ伯の君の家に遊びに行った時だね」

懐かしむようにしゃべるアレルをみてマチルダは困惑していた。

昔、家に来た？ 家にはあの子がいたからそう簡単に客が来るはずないし・・・昔の記憶にはあの子とマチルダがサウスゴータ家で一緒に遊んで・・・

「まさか・・・テファの母親に会いにきた時にいた子かい？」マチルダが言う

満面の笑みで「そうです」とアレルは言った

「あの時、あなたは僕に女装をさせたり、嫌がる僕をゴーレムで追いかけてましたっけね」

「・・・」

「いや気にしてないから。たぶん」ぼそ

「は、は、まあ、すぎたことは忘れちゃったね」

「えっ、あの時マチルダが僕に言ったことも忘れたのですか？『私ガアレルのお嫁さんになる』と、言っていましたよね？」

あの時のマチルダは可愛かったですね『テファと私のどっちが大事なのよー!!』と言ってまたゴーレムで追いかけてきましたね」

「よく言うよ!! あんたは、ちょこまか逃げていたじゃないか」
顔を真っ赤にして反論する

「普通、ゴーレムを使って追いかけますか？」

「いいじゃないか、別に・・・」

「まっ、そういうことにしておきましょう。何故テファと一緒にいないんですか？」

あの孤児院で年長者はテファ一人だけ

今の時代、子供だけで生活するのは難しい

「あの子達のために働かなくちゃいけないからね」

あの孤児院で働けそうなのはマチルダぐらいなのだ

テファも姉であるマチルダばかり、働かせたくはないが、テファは人前に出ることができない

「・・・確かに、子供だけで生きていくにはこの世界はつらいですね」

孤児院には戦争で親を亡くし子供や捨てられた子供などがある

戦争は子供から父親を奪う

ある日、父親は帰ってこなくなる

戦争に行つて死んでしまった

もう、父親は帰ってこない

残された母親は子供を育てようと懸命に働く

朝から晩まで、休みなしに働く

稼いだお金は高い税金に持つてかれ、手元にはほとんど残らない

働いても一向に豊かにならない平民の暮らし

追いつめられた母親はわが子を捨てる・・・

子供が外から帰ってくると家には誰もいない

子供は母親の帰りを待つて、1日、2日、3日・・・何日待つて
も、母親は帰ってこない

子供は母親の帰りを待ち続ける

誰も助けてはくれない

まだ母親に甘えたい年

一人ぼっち

暗い夜、いつもベットの横で寝るまで傍にいてくれた母親の姿はない

そして、子供はきづく

母親は……帰ってこないのだと

自分は捨てられたのだと

マチルダは、テファ達のために働きながら、そのような境遇の子供を見つけてはウエストウッド村に連れていく

生活に余裕があるわけではないが、マチルダには孤独がどうゆうものなのか、理解していた

「……ああ、そうだね」

マチルダの家系はジェームズ一世の弟、モード大公に仕えていた

モード大公はエルフの女性を愛して妾とし、彼女との間にティファニアが生まれた

兄であるジェームズ一世にそのことを知られ、彼女らの追放命令を再三拒否したため、ついに投獄され処刑された

「・・・アレル、あんた、テファにあったのかい？」

「ええ、テファのいる場所についての情報が最近手に入ったので、学院に来る前までずっといましたよ」

アレルはテファがウエストウッド村にいるのを最近知り、今朝までずっと村に滞在していた

「・・・そうかい」

すこし、機嫌の悪くなったマチルダ

妹分のテファにすでにアレルがアっていたことに、少なからず嫉妬している

「（なに、考えてるんだか、あたしは・・・）」

それから、昔話をしばらくした後、夕食の時間になったので食堂に向かうことにした

幼き頃の出会い（後書き）

れ、れんぞく・・・

友人（前書き）

間違っ
て一回消
してしま
った！！

友人

場所：食堂

アレルが食堂に入るとすでに大勢の生徒が座っていた

テーブルの上には豪華な料理が並べられ、給仕係のメイドが忙しく働いていた

アレルは空いている席に向かって歩きだすと、一斉に生徒達の視線が集中した

アレルはその視線を気にせず、席に座った

アレルのまわりには、まだ席が空いているのに誰一人として座ろうとしない

意図的にアレルを避けているようだ

女子はアレルの美貌に、男子はその美貌を妬む

しかし、どこにでも例外はある

「失礼するよ、ミス」

「？」

アレルの目の前の席に変態が現れた！！

胸元が広く開いたフリル付きのシャツを着て、キザッたらしくバラを片手に話しかけてきた

「君のように美しいバラに声をかけずにはいられなくなってしまったのでね。」

僕はギーシュ。ギーシュ・ド・グラモンだ。美しいあなたの名をぜひ教えていただけませんか？」

「・・・」

「おや、どうしたんだね。僕の魅力に声も出せないのかな？ まったく罪深い男だよ僕は」

と言つて、自分自身の身体を抱くような仕草をする。明らかに浮いた存在にアレルはしばらく固まってしまったが、

「・・・失礼。トリステインの貴族は男色家なのかな？」

「へっ？」

「あいにく、私は男だよ」

「・・・はは・・・そんな馬鹿な」

「正真正銘の男だ」

かなりご立腹らしいアレル。その怒った顔すら、周りを魅了する

「い、いやあ・・・すまなかった」

「いや、そういう人もいるのだろう。世の中には男が好きな男もいるのだな。だがすまないが君の告白に答えることはできないよ・・・」

「

と生温かい視線をギーシュに向けるアレルに

「ち、違う。僕にそんな趣味はない。普通に女の子が大好きだよ！」と大声で叫ぶ。

ほかの貴族からの視線がかなり痛い、特に女子からの

蔭では「おホモたち？」

「ボーイズラブ？」

「はあはあ」？

数名が妄想の世界に旅立っていった。そこで、アレルとギーシュのからみあい・・・（これ以上は）

「まったく、入学早々みんなに誤解されてしまったじゃないか」

とかなり機嫌が悪いギーシュ。

「お前が悪いんだろ」と返すアレル。

わずかな時間にもうギーシュとアレルは打ち解けていた。

「まあ、気にするほどのことじゃないだろ。ギーシュの二つ名は『変態』で決定だね」と笑いながら言うアレルにギーシュは

「そんな二つ名があるかー！！僕の二つ名は『青銅』だ！！」と叫ぶがこの先、ギーシュのもう一つの二つ名が『変態』になって語り継がれたのは別の話で。

「改めて、僕の名はギーシュ・ド・グラモン。トリスティンのグラモン伯爵家の四男だ」

「僕は、アレル・ラ・フォン・ランカスター。ゲルマニアの侯爵家の長男だ」表向きの地位を話す

「へー君がああランカスター家の秘蔵子かい」

「なんで？」

「ハルケギニアで一番経済力があるゲルマニアで王都より発展している領だから有名だよ」

「ふーん」

ランカスター家の領はゲルマニアの中で最も発展している。

例えば、平民の衛生環境

ハルケギニアでは路上に糞尿を捨てる習慣があり、王都であっても道が汚い。

衛生環境が悪ければ、病が流行するのは当然である。

アレルはまず、路上に糞尿を捨てることを禁じ、それを破った者には重い罰を与えることにした。

さらに、糞尿を集め、それを畑の土の栄養分として使うことを考案した。

糞尿を集めることを専門とする仕事には、他の仕事に比べて高い給金をアレルは支払うことにしていたので、この仕事をやりたいという平民の応募がかなりいた。

最近では、汲み取り式の公衆のトイレを作ったりしている。

次にアレルは平民向けの公衆浴場を作った。

平民は主に蒸し風呂と呼ばれるサウナに入って汗をかいた後、水をかぶって汚れを落とすのが一般的な平民の風呂。

そこでアレルはエルフとの交易から手に入れた火石を使って水を温める装置を作った。

各家庭にいつでも温かいお湯が使えるようにした。

他の領に比べて平民の生活がかなり良い領のため、ランカスター領には大量の平民が流れ込み、日々大きくなっている。

他にも、平民でも簡単に手にすることができる安いがよく効く新しい水の秘薬の販売。

平民の子供のための病院や学校なども作った。

これらの施設は、この領の領民であれば自由に使うことができる。

そんな領の長男であるアレルはゲルマニア内では人気であるが、他の国の貴族は平民に対して優遇しすぎだという意見も多い。

「どうしてそこまで平民を優遇するんだい？」

ギーシュ疑問にアレルは

「僕は領民たちの生活がよりよくなるように少し手を貸しただけだよ」

「じゃあ、なんでトリステインに留学したんだい？君の実力だったらわざわざ留学しなくても良いんじゃないかい？」

「まあ、いろいろあるんだよ。いろいろ」含みのある笑みを浮かべるアレル

「ふん。しかしゲルマニアの貴族がトリステインに留学か。かなり風当たりが強いのではないか？」

トリステインは伝統を重んじる風習（貴族至上主義）がある。

実力があれば平民は爵位をお金で買うことができる完全な実力主義のゲルマニアを馬鹿にする者が多い。しかし、トリステインは貴族が既得権益を手放さないように、平民に対しての扱いがかなりひどい。

貴族のために尽くすことが平民にとって幸せであるという考えを持つ者もいる。

一生を貴族の奴隷のような生活をしたくない平民の多くはゲルマニアに移り住む。

トリステインにとって、平民が自国から他国に行くことで、今までその平民から徴収していた税が取れなくなるため、収入減になる。

トリステインは一人の平民から収入の6割を税金として取るがゲルマニアでは2割しか取らないので、ゲルマニアには様々な国から人が集まって来る。

人が集まれば、そこで物を売ろうとする商人が集まるのでゲルマニアの経済は好景気だ。

ゲルマニアで富を得ることに成功したものが、貴族の称号を皇帝からお金を払って買う。

新しく貴族になった者は商人が多いので、『貴族あつての国』のトリステインの貴族たちにとって、自分たちと同じ地位やそれよりも上の地位のものが平民上がり者であるという自分たちのプライドが許さないからだ。

「学び舎まで、そんな差別はないだろう？『成り上がり』『野蛮』
という偏見で人を見下すのはよくないんじゃないか？」

「君みたいな考えを持った、貴族のほうがりステインではおかしいのだよ」

「そうなのか。それにしても、ギーシュは僕がゲルマニアの貴族なのに、そういったことをしないね」

「僕はべつに気にしないだけだよ。アレルとは長い付き合いになりそうだし」

と言ってグラスを上げる

「僕もギーシュとは長い付き合いになりそうだ」と笑顔でグラスを上げ

「乾杯」

アレルは学院で初めての友人ができた。

これからの学院生活にさまざまな道を想い描いていた。

友人（後書き）

ね、
ねむい・・・

物語（前書き）

出生の秘密

物語

あれから、ギーシュとワインを大量に飲んで部屋に戻った。

「ふう、少し飲みすぎた・・・」足元がかなりふらついている。

そのまま、ベット倒れこむように眠った。

??? side

「むかし、むかし、あるところに、一人の男がいました。

男はある国の王様の息子でした。

男は王の息子として周囲の期待を受け、立派な王様になるように日々努力していた。

ある日、その男の住む国で、大きな戦いが起った。

町では「エルフ」が攻めてくるといふ噂が流れ、人々はエルフ狩りという名の殺戮を行った。

夫を戦いで亡くした女や社会的に地位の低い者がその殺戮の対象になった。

男は自ら戦場に向かいそのような無益な争いを終わらせようとした。

向かってくる敵を自らの手で殺し、男の鎧は返り血で真っ赤になった。

男はその青い瞳で戦場を見つめ何を思ったんだろう。

男はそこでフード付きのマントをかぶった一人の女に会った。

女は男に自分を殺してほしいと涙ながら訴えた。

男は訳がわからず女の話聞いた。

そもそもこの争いはその女の種族が原因ということらしい。

女は男の持つ剣を自分の首につけた。

フードがずれて女の顔が見えた。

男はその美しさに息をのんだ。

その美しい銀髪が時折吹く風でなびく。

男はその女の耳が自分の耳とは違い長くとがっていることに気づいた。

男は女がエルフであると知った。

不思議と男は女がエルフであることに恐怖するどころか、むしろ興味を持った。

男は王である父親にエルフとは恐ろしいものであると教えられてい

たが、

目の前にいるエルフの女の美しさはそんなことを思わせないほどであった。

まるで女神のようだ。

男は出会って間もないのに女に恋をした。

男は女に求婚した。

女はすべてに絶望していたようで流されるまま男の求婚を受けた。

男は今まで自分が築き上げてきたもののすべてを捨てても女を守ろうと決意した。

女と男は小さな教会で結婚式を挙げた。その教会はブリミル教関係の教会だったがその司祭は快く二人の結婚式をとり行ってくれた。

その司祭の子供だろうか、幼いながらもその司祭の子供は新婦のドレスの着付けを手伝ってくれた。

二人の結婚式を祝福する者は司祭とその子供だけであったが、他のどの結婚式より神聖なものであると司祭の子は思った。

結婚式をあげてから二人は旅に出た。

さまざまな村に行き、いろいろな人たちと出会った。

だんだん男の妻である女の顔にも笑顔が戻ってきた。

二人は共に支えあいながら旅を続けていたが、ある日、男の父親である王が病に倒れたと聞いた。

すべてを捨てて女と旅をしていた男であったが、その決心が揺らいだ。

さらに周囲の国がこれを機に攻め込もうとしていることも聞いた。

王にはその男以外にも子供がいたが、兄弟であるのに敵同士の関係であった。

このままでは、自分が生まれ育った国が滅んでしまうと思う男に、妻は自分のことは大丈夫だから国を守るために行ってくださいと言って、一本の剣を男に渡した。

その剣には精霊の加護が施されていて、敵の攻撃から持ち主を守る力があつた。

男の妻のお腹の中には新しい命が宿っていた。

男は必ず戻ると言って、村に妻を残して国に戻った。

王が倒れた国の中ではだれが次の後継者になるかで争いが起こっていた。

国としての機能が完全にマヒしている中、男は生まれ育った国に戻った。

男は自分の兄弟たちの醜い権力闘争に絶望した。

議会でそのようなことを議論している間にも他国の軍が国境を超え始めている。

誰一人として、軍に指示を出さずに時間だけが過ぎていく。

男はそんな兄弟たちをいちべつすると、自ら軍の先頭に立ち、敵に向かつていった。

妻に渡された剣を戦場でふる男は侵略者を倒していった。

戦いが激化する中で、男が旅をしたなかで知り合った者の協力を得ることで、国を救った。

そして自分の父親はそれを見ることもなく亡くなった。

男はすぐに愛する妻のもとに戻ろうとした。

しかし、男がいなくなれば自分の血縁関係にある者達による権力争いが起き、国が荒れてしまうと考えた。

これから生まれる新しき命のために、自分がやらねばならないと考えた男は父親の後を継いだ。

自らをゲルマニア皇帝アルブレヒト三世と名乗った。

新しき王は血縁関係の者のほとんどを幽閉した。

皇帝は自分の妻と子に危害が行かないようにするため。

自分に悪意がすべて向かうように政治を行った。

ロマリアの神官に多額の支援をし、二人が異端の存在でないように働きかけた。

その時、結婚式を挙げたときの司祭の子供に再び男は会った。

彼は成長しロマリアのブリミル教での発言力を手に入れたがっていた。

男はその者に力を貸した。

代わりにその者が、それなりの地位に上がったら、男の妻と子に対しては干渉しないことを約束させた。

その者は後に教皇の座に上りつめるのはまだ先の話だ。

そうして、男はできることはすべてし、愛する妻とまだ見ぬ子のもとに向かった。」

物語（後書き）

いかがつすか、一度読んだことがある方はつまらないかもしれませんが・・・

蒼髪の姉妹（前書き）

目が、目が

パソコンのやりすぎで、ドライアイ

蒼髪の姉妹

朝、アレルは目を覚ますと自分の部屋のベットで寝ていた。

昨日と同じ、学園の制服を着たまま眠ってしまったようだ。

「ひさびさに飲みすぎたかな・・・」軽い二日酔いになった。

「今日から授業だし、仕方ない」と言っつて、アレルは杖をふるう。

杖の先から青色の光が出て、アレルの身体を包みこんだ。

みるみる、アレルの顔色が良くなつていった。

「まさか二日酔いで魔法を使うことになるとは・・・」

この魔法はアレルが作ったオリジナル魔法で体内の水の流れを正常な状態に戻す魔法だ。

もう一度杖をふって空気中の水を集めて桶にためて、火の魔法で温め顔を洗った。

「ふー、久しぶりにあの話を夢に見たな」

アレルが幼い時に眠る前に母親がよく話してくれたお話の一つだ。

何度もその話を聞いたが、男が妻と子供のもとに向かった後、どうなったのか母に何度も聞いても教えてくれなかった。

「まだ、朝食まで時間があるな」と言って、ベットの傍らに置いてある細長い袋を持ち、部屋を出た。

まだ早い時間なのだろう、他に誰もいない広場にアレルは着いた。

広場の中央でアレルは袋を縛っている紐をといて一本の剣を出した。

メイジは基本的に魔法しか使わない。

剣とは平民が貴族の魔法に対して少しでも近づこうと作りだした武器の一つだ。

その剣をメイジである、アレルが持っているのは他の貴族から見たら、変なことなのだ。

『平民は貴族に絶対勝てない』という考えを持つ者は多いが、アレル自身はそう思っていない。

アレルが作り上げた『天空』の騎士団に所属しているものは全員が平民の武器である剣や槍、弓などを扱えるように訓練している。

なぜなら、メイジにとって、魔法は確かに強力な武器であるが、使うには長い詠唱が必要でその間、メイジは無防備だ。

さらに精神力が切れてしまうと魔法は使えない。

魔法の使えないメイジはただの平民より弱い存在だ。

アレル自身も騎士団のトップであり『メイジ殺し』と呼ばれる猛者

達と日々剣を競い合った。

アレルの剣の腕前も『メイジ殺し』のレベルまで成長している。

この学園に来る前に騎士団の剣の使い手達と一対多数の模擬戦をしたが、アレルは剣だけで勝ってしまった。

一応魔法の中にも『ブレイド』という杖の先に魔力をまとわせ刃にするものがあるが、それも精神力がなくなれば使えなくなる。

そのため、騎士団のメンバーは魔法以外に何か武器を扱えなくてはならない。

剣・槍・弓・銃・槌などが主に騎士団のメンバーが好んで扱う。

中には、己の拳こそ、最強の武器だと言って敵に素手で挑む者もいるらしい。

アレルは、それらの武器などを完璧に扱えるが、鍛錬の際には剣を好んで使う。

一通り、剣をふるい終わると、木の陰に隠れてこちらを見ている少女を見つけた。

タバサ side

この学院に来たのは昨日。

学院なんて興味はなかった。

『死』の感覚を知らぬ者たち。

戦場を知らぬ者たち。

そんな者たちと一緒に生活することになるなんて、

一昨日まで（戦場）までは考えもしなかっただろう。

私はガリアの王族だった。

私の父は現ガリア国王の弟であった。

父は12歳でスクウェアクラスに達した天才的なメイジ。

魔法以外にも様々な能力に優れていた。

反対に魔法の素質に恵まれぬ兄を励ますなど、高潔で思いやりのある人柄から、宮中の人々の多くに慕われていた。

誰しもが次期国王はジョゼフの弟のシャルルだと目されていた。

しかし、前王は亡くなる前に、私の父ではなく兄であるジョゼフを王にした。

父は、兄であるジョゼフが王になったことを心から祝福して共に国を支えることを誓った。

私はそんな父が大好きだったし、伯父ジョゼフや従姉イザベラとは仲が良かった。

父も伯父もこれからのガリアの明るい未来を築くことに胸を躍らせた。

よく、二人は私達に自分達がどのような国にしたいかを話してくれた。

その話の中のガリアは、とても、とても、素晴らしい国であった。

いつごろだろう？

私達の運命が崩れたのは？

ある日、父は森に狩りに出かけた。

いつも、父は伯父とどちらが大きな獲物を獲ってこれるか競いあっていた。

その日も父と伯父はどっちが大物を仕留めてくるか、笑いながら話していた。

そんな二人を母様とイザベラ姉と私で見送った。

それが、生きていた父をみた最後の時だった。

父は変わり果てた姿で帰ってきた・・・

そこには、いつも笑って私を抱き上げてくれた父はいない。

どうして？

ねえ、父様？

寝てないで起きてよ。

母様が泣いてるよ。

どうして起きてくれないの？

私は父様が死んだことを受け入れられずにいた。

母様は私を抱きしめて泣く。

気がつくつと、私も泣いていた。

私と母様は涙を流し、父の寝ているベットの前で泣いた。

ああ、父様はもう、いないんだ。

しばらくして伯父とイザベラ姉が来た。

伯父は母と私に父が毒矢を受けて死んだということを教えてくれた。

油断があつたのだろう。

いつも、兄弟で狩りをしに行く森。

伯父が王になる前からよく行っていた森。

父と伯父は狩りの際、護衛をつけないで狩りをする。

今まで、何も起こらなかった。

その油断が父の命を奪った。

伯父は私と母様に言った。

その矢は本当だったら、自分にあたる筈だったのだと・・・

父は、伯父をかばって矢を受けた。

伯父は自分が殺したようなものだとしてそんな顔を私と母様に向けた。

伯父は泣きたくても泣けない。

王である伯父が泣くことは許されないからだ。

例え、愛する家族、血のつながった兄弟であろうと、泣いてはならない。

伯父は王なのだ。

イザベラ姉は私を抱きしめ泣いていた。

自分の父が泣けない代わりに、泣くように・・・

屋敷は悲しみに包まれた。

みな父様のことを悲しんだ。

平民の武器である弓で死ぬということ、メイジとしても貴族としても屈辱的なものだ。

伯父は犯人を探させた。

しかし、いくら探しても父様を殺した犯人は見つからない。

人々の間で、『犯人はジョゼフでないだろうか』という噂が流れた。タバサはその噂を聞いたが、タバサはイザベラのことを本当の姉と
思い伯父であるジョゼフのことをもう一人の父であると思っていた
ので、その噂は嘘であると思っていた。

父様が亡くなって、しばらくしたころ、伯父は盛大なパーティを開いた。

夫を亡くしたショックでまいつている母様と私の気分転換に思っ
て開いたパーティ。

久しぶりに公の場に出た母様と私はイザベラ姉と伯父に会った。

伯父は何とか母様と私の負担を軽くしてやろうと積極的に話しかけ
てきてくれた。

イザベラ姉も私に話しかけてきてくれた。

少しだけだが、母様の顔に笑顔が戻ったように私は思えた。

あの、ワインを母様が飲むまでは……

そのワインに毒が入っていた。

飲んだ者の心を蝕む毒が・・・

それから、私の顔から笑顔が消えた。

母様が飲んだワイン・・・

私が母様に元気になってもらおうと、持っていたものだった。

それから優しかった母は変わってしまった。

私が持っていた人形を私の名で呼ぶ。

ねえ、母様

私はここにいますよ

やめて・・・

その人形は私なんかじゃないよ

・・・・・・・・・・

私はそれから、その人形の名を自分の名前にした。

『タバサ』

それが、私の新しい名。

それから自分自身が人形であるとして、感情を殺すようになった。

ガリアの北花騎士団に所属してさまざまな任務をこなした。

任務の中には人を殺すようなものもあった。

命令とあれば、子供すら殺した。

一人で、強大な龍と戦った。

自分は任務をこなすこと以外で存在価値がみいだせない。

あそこには私の帰りを待つてくれる人はいない。

任務の間に、母の心の病を治す薬や魔法を探した。

さまざまな薬に解毒魔法を母に試してみたが一向に良くならない。

そんな中、自分の上司にあたる現国王の娘で薔薇騎士団のトップであるイザベラ、私の従姉に呼び出され、トリステイン魔法学院に行くように命じられた。

イザベラとはあのパーティ以降、まともに会話をしてない。

イザベラのことを姉と思っていた時もある。

しかし、父と母の事件で私とイザベラの間溝が生まれた。

昔のように一緒に笑いあうことはもう無理だろう。

命令の内容は『トリステイン魔法学院に入学する』というものだが、おかしい。

いつもなら、もっと帰ってくるのが困難な命令ばかりだ。

トリステインに向かう前の日に再びイザベラに呼び出された。

部屋に入るとイザベラに『サイレントの魔法をかけな』と命令されたので言つとおりにした。

「明日、お前はトリステインに行くのはわかってるだろう」

無言で頷く

「父親・母親がああなっちまってから、お前は人形みたいになった」

「・・・・・・」

「少しはしゃべったらどうだい？」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

タバサとイザベラは互いに黙ったまま相手を見る。

イザベラはため息をついた

「まったくエレノアは・・・・」

久しぶりに自分の本当の名がイザベラの口から出たことにタバサは驚いた。

「この留学の話はエレノアの安全を考えて、私と父とで決めたことなんだ」

「・・・・なぜ？あなたたちが私にそんなことをする理由がない」

「何言ってるんだい！！シャルロット、あんたは私の妹だよ。あの

事件であんたが変わっちまったとしても、あたしはあんたの味方だよ」

「・・・・・・・・」

「それと、あんたの父親を殺した者と母親の病の原因がわかった」

「!?!」

タバサの顔がわずかに動揺した

「あたしの父を殺してその後にあんたの父親を次の王にして、取り入ろうとした強硬派らしくてね。それが、自分達が王にしようとしていた者を殺すなんて、皮肉だね。」

「・・・・・・・・」

自分の杖を持つ手にかなりの力がはいる

「そいつらはもういないよ」

「・・・・・・・・どうして」

タバサの身体からはおびただしい量の殺気と魔力が溢れている。

「そいつらは現王、あたしの親父が全員始末しちゃったよ・・・」

「すまなかつたね・・・つらい思いをさせて・・・」

イザベラはタバサを抱きしめる。

そこには、昔慕っていた、姉の姿があった。

「・・・姉さん」

あれから、誰にも頼らず一人で生きていく事を誓ったタバサにとって、イザベラ存在は言葉に表すことができない。

しばらく二人は抱き合っていた。

あれから、イザベラとタバサはこれからのことを話し合っていた。

「・・・母様は？」

「ああ、あの毒はエルフが調合したみたいなんだ」

「・・・エルフ」

「今、親父が解毒薬を探し回っているよ。けど相手がエルフだから、なかなか交渉が大変なんだよ」

「それと私の留学とどう関係があるの？」

「一つはシャルロット自身の安全のため。もう一つはゲルマニアの王族がトリステインに留学するらしいという噂があるんだけど、その噂が本当だったら、その王族と接触すること」

「・・・なぜ？」

「ゲルマニアはエルフと交易しているという噂があるからそれを確かめることと、可能であればその王族に解毒薬の件に協力してもらうこと」

「・・・わかった」そう言ってタバサは部屋を出た

部屋を出る際に

「・・・ありがとう。イザベラ」

「ふっ、気にしない、あたしはあんたの姉なんだから」

少しだけではあるが、昔の二人に戻れた気がする。

トリステイン魔法学院に入学してタバサはゲルマニアからの留学生が二人いることを知った。

一人は、真っ赤な髪の女 名をキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーと言っらしい。

もう一人は、長く伸ばした銀髪をポニーテールにしている男 名を
アレル・ラ・フォン・ランカスター。

家名からはどっちが王族かわからない。

おそらく自分のように正体を隠しているのだろう。

詳しく調べるのはまた明日すればいいと考えたタバサは今日のこ
ろは寝ることにした。

「……ねむい」

少し早くに起きてしまったタバサはふと窓の外を見ると学院の制服
を着た男の子が中庭に歩いて行くのが見えた。

気になったので身支度をして追いかけることにした。

木の陰から中庭の方を覗くと先ほど見かけた男の子が剣をふってい
た。

「……キレイ」

男の子の剣をふる姿はとても美しく朝日に男の子の銀髪が反射した。

まるで本の中に出てくる勇者のようだった。

自分の好きな『イーヴァルディ』の物語のように。

男の子の剣舞が終わり、覗いていた私の存在に気づいたようだ。

男の子は私のもとに歩いてきた。

タバサSide Out

「やあ、おはよう」とアレルは自分のことを覗いていた少女の所に歩いて行った

「・・・おはよう」とタバサも挨拶を返す

「えーと、もしかしてずっと見ていたの？」

こくりとタバサは頷いた

「・・・とても綺麗だった」

「ははは、ありがとう」アレルは笑った

「・・・なぜメイジが平民の武器である剣を使うの？」

「うーん。どうしてだろうね？」と質問に質問を返す

「・・・」

「まあ、体を鍛えるにちょうどいいからぶっているのだよ」

「・・・そうゆうことにしておく」余計な詮索はしない方がいいよ
うだ

「はは、ありがとう」

「・・・タバサ」

「へっ？」

「私の名前」

「そうか。僕はアレル・ラ・フォン・ランカスター。アレルと呼んでね」

「・・・いいの？」

「なにが？」

「名前で呼んで？」

「全然かまわないよ。もう知り合いなんだし」と笑顔で答えるアレルをみてタバサは顔が赤くなった

「・・・わかった」

「うん。よろしく」

こくりとタバサ頷いた

「じゃ、僕は汗を流しに行くよ」

「・・・また」

そう言って二人は別れた

騒がしき朝食（前書き）

最初のころと少し違います。

騒がしき朝食

アレルはタバサと別れた後、部屋に戻り汗をふき、服を着替えた。
ちやうど朝食の時間になったのでアレルは食堂に向かった。

食堂に着くと一部の席に人が集まっていた。

「？」

「やあ、アレル。おはよう」

とギーシュが声をかけてきた。

「ああ、おはよう」

と言ってアレルも席に着く。

「なあギーシュ、あの人ばかりは何だ？」

アレルの指を指す方向をみたギーシュは

「うん？ああ、あれか。真ん中に桃色の髪の子がいるだろ」

「うん」

貴族の男共の隙間から時折、桃色の髪が見える。

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。

トリステインのヴァリエール公爵の三女だよ」

「ヴァリエール公爵？」

「君はゲルマニア貴族だろ？その君が知らないのかい？」

ギーシュはあきれながら言う。

「トリステインで王族の次に権力を持っている家系さ」

「へっ」

群がる男共の中心に引きつった笑顔を浮かべる女の子がいた

「まるで砂糖に群がる蟻だよ」

ギーシュはその集団をみてそう言う。

「ギーシュは行かないのか？女の子が大好きなんだろう？」

笑いながらアレルは言う。

「確かに可愛いけどね、初日に声をかけたんだけど……. 思いつきりふられたよ」

ギーシュは肩をすくめながら言った

「ははは、結構気の強そうな顔をしているね」

「どうだい？アレルもアタックしてみたら？」

「うーん、じゃあ声だけかけてみるか」

「へっ、本気かい？」

ギーシュは冗談のつもりで言ったのだが・・・

「じゃあ行ってくる」

「お、おい」

アレルは人だかりに向かって歩き出した

ルイズ side

朝食を食べに、食堂に来た私の周りに貴族の男が集まってきた。

「ミス・ヴァリエール今度、馬で遠乗りに行きませんか？」

「いや是非僕と」

「おい、抜け駆けするなよ」

食堂に着いてからずっとこうだ。

はっきりに言ってる・・・ざ・・・い！！

ヴァリエールの名前に引き寄せられてきた男が!!

だんだん顔が引きつつてくるのが自分でもわかる

ルイズここは我慢よ!!

入学二日目で問題を起こしてはだめ!!

笑顔、笑顔、笑顔、笑顔・・・

「・・・え、ええ。いつか・・・」

「あゝ、ミス・ヴァリエールは今、僕に微笑んだ」

「いや、僕だ!!」

「違うよ。僕だよ!!」

あゝ、もう限界

みんな死ねばいいのに

「失礼、ミス・ヴァリエール」

そこには銀髪ポニーテール男が立っていた

ルイズ side out

「ちょっと通してくれるかな」

「おい、割り込むな・・・よ」

男はアレルを見て固まった

「通してもらっていいかな？」

「あ、ああ・・・」

その男子生徒はアレルに道を譲った。

「ありがとう」

アレルは笑顔でその男子生徒に言う。

「あ、あのー!!」

「はい？」

道を譲ってくれた男子生徒がアレルに話しかけてきた。

「そ、その・・・今度僕と・・・」

「？」

顔を赤らめ、その男子生徒はアレルに

「・・・僕と一緒に遠乗りに行かないか？」

「・・・」

ギーシュに続いて二人目だ

「そ、そのとうかな？」

自分の髪を指でいじりながらアレルに話しかける。

「・・・僕は男だ」

「へっ？・・・」

「・・・通してもらつたよ」

「ど、どうぞ」

男子生徒は再びアレルに道を譲る。

「お、俺は、俺は・・・うわ」

と言って男は走って行ってしまった。

「・・・やれやれ」

アレルは再び人だかりの中心に進む。

そのやり取りを人だかりの中心行くまで何度も繰り返した……

ようやく人だかりの中心に着いた。

「失礼、ミス・ヴァリエール」

桃色の髪 of 少女が不機嫌そうな顔をアレルに向けてきた。

「……あんた誰よ？」

「僕はアレル・ラ・フォン・ランカスター。アレルと呼んでください」

「ふん。私に何かよう？」

「いや、人だかりの中心にいる女の子はどんな子かと思ってね」

笑いながら、アレルはルイズに言う。

「……それだけ？」

「うん。それだけ」

「「「「「「・・・」」」」」」

周囲も二人の話に入り込めない

「（うん）」

アレルはルイズの身体を上から下を観察した。

「（チンチクリンだね）」

「（好みじゃないなあ）じゃ、そういうことで」

「ちょっと、本当にそれだけなの!？」

ルイズは今まで自分に群がっていた男子生徒とアレルは同じ者と考
えていた。

しかし、アレルが少ししか自分に興味がないそぶりを見せたため、
ルイズのプライドを傷つけた。

「うん、そうだよ」

確かにルイズは美少女であるが、アレルのタイプではないらしい。

「私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ」

ルイズはアレルに自分のフルネームを言う。

「だから？」

アレルはルイズが何を言っているのかよくわからなかった。

「な、な、な」

ルイズは顔を真っ赤にしてアレルを指さす。

「（な？）」

アレルは首を傾げる。

「トリステインのヴァリエール公爵家三女である私に対してそれだけの理由で話しかけたの！！」

怒りで顔が真っ赤になった。

「？」

「あんだどこの田舎貴族よ」

「ひどいな・・・ゲルマニアは田舎じゃないよ」

「ゲ、ゲルマニアですってー!!」

大声をだすルイズ

「？」

ルイズはアレルから視線を外しアレルに

「・・・野蛮人が高貴な私に話しかけないでくれるかしら」

アレルがゲルマニア人だと知ってルイズは態度を変える？（元々きつような・・・）

「それじゃ」

そう言ってアレルは自分の席に戻って行った。

「あ、あのミス・ヴァリエール？」

俯くルイズに生徒の一人が声をかけた。

「あゝもう!!」

と言って叫んだ。

「ひっ!!」

男子生徒がルイズの叫びに驚く。

「ゲルマニア人のくせに、野蛮人のくせに・・・」

あんな男にむきになるなんて・・・

あのツエルプストーと同じ国の人間なんかろくなやつがないんだから

絶対そうよ

あんな奴知らないんだから！！

「いやゝ、嫌われちゃったみたい」

笑いながらアレルはギーシュの前の席に座った。

「まったく・・・ヴァリエール嬢はゲルマニアの人間のことを嫌いなんだよ」

ギーシュはアレルに説明する。

「なんで？」

「ヴァリエールの家はゲルマニアの国境付近にあるんだけど、ヴァリエールの隣にあるツエルプストー家と昔から仲が悪いんだ」

「へゝ（ああ、あの領か・・・）」

「なんでも、ヴァリエールは代々ツェルプストー家の人間に婚約者を奪われたらしいんだよ」

「だからゲルマニア人に対して冷たいのか・・・」

「まあ、気を落とすことはないよ」

ギーシュはアレルに言う。

「？」

「ここには他にも美しい薔薇（女の子）はたくさんあるのだから」

「・・・」

「なっ、なんだいその可哀そうな者を見る目は！！」

「・・・いや。前向きすぎるのも、どうかと思うんだけど」

「い、いいじゃないか。たとえばあそこに座っている子」

金髪の女の子が他の生徒としゃべっている。

「？」

「モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ

って言う子なんだ。僕の幼馴染でなかなか可愛いと思うんだけど」
グラモン領とモンモランシ領は隣なのでギーシュは幼い頃からモンモランシーと遊んだことがある

「まっ、がんばれ」

「ああ、見ていてくれアレル。今から僕の魅力で彼女を僕の虜にしてくるよー!」

そう言ってギーシュはその子のもとに歩いて行った

「・・・まっ、僕には関係ないな」紅茶を飲みながらそう考えたアレルであつた

??? side

「あら、懐かしい顔がいるわね」

一人の女子生徒がアレルを見てそうつぶやいた。

女子生徒の周りにはルイズと同じように男子生徒が群がっていた。

「確か最後に会ったのは、皇帝の主催のパーティの時だったかしら？」

ふふふ、いい男になったじゃない♪」

s
i
d
e

o
u
t

騒がしき朝食（後書き）

最後まで変えてみた。

授業開始（前書き）

同じ・・・

授業開始

「いやゝ食べた食べた」

アレルはお腹に手を当てながら言った。

アレルの座っていた席には大量の皿が山積みになっていた。

「この食堂の料理はおいしくて、いくらでも食べられるよ」

「・・・」

「うん、どうした？」

さつきからしゃべらないギーシュにアレルは声をかける。

「いや・・・いったいその細い体のどこにあの量の料理が詰まっているんだ」

かなりの量の料理を食べたはずなのにアレルのスタイルは全く変わらない。

「そ、そうか」

目の前であの量を軽く食べているアレルをみてギーシュは食欲がなくなつた。

周りにいた他の生徒も口を大きく空けて驚いていた

「まあ、食事をされる姿もまた良い・・・」

一部の生徒の間では好評みたいだ。

朝食を食べ終わった後、アレルはギーシュと一緒に教室に向かった

「ここだっけ僕らの教室は？」

「ああ、この教室だよ」

先にギーシュが教室に入る

教室にいた女子生徒はギーシュの後ろにいるアレルをみて内心

「「「「「（よっしゃー!!）」「「「「「」

声をあげる

「結構広い教室だね」

「当然さ、トリステインの貴族である僕たちが勉学を学ぶ所なんだから」

「おっ、窓側の席いただきー!!」

「お、おい。待てよ」

ギーシュの話を無視して、アレルはさっさと席をとりに行った

ギーシュがアレルを追いかけて近くの席に座ろうとするが複数の殺気を感じた・・・

「ひっ！」

おそるおそる振り返ると目をギラギラと光らせ、詰め寄ってくる女子生徒の群れ

「ははは、ぼ、僕は向こうの席に行こうかな・・・」

そう言って違う席に座った。

「ちょっと、私が彼の隣に座るのよ!!」

「いいえ、わたしよ!!」

「はあはあ、今のうちに」

「」「」「抜け駆けするな!!」「」「」

そこは修羅場だ・・・

「うゝんむにゃむにゃ・・・」

アレルは寝ていた

とことこ・・・ポスン

「う、うゝん」

音がしたので目を覚ましたアレルはふと横を見ると、今朝見た女の子が自分の隣に座っていた。

「やあ、おはようタバサ」

朝会った蒼い髪の少女がアレルの横に座っていた。

「・・・おはよう」

読んでいる本から顔を上げ挨拶をするタバサ。

「くっ、まだ前の席が」

女子生徒は今度は血走った目を席に向けるが、ちょうど先生が入ってきたので、泣く泣く他の席に座った。

「さて、本日は自己紹介をしてもらおうかな」

担当の先生が言ったので前の席から順番に言っていく

「キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェ

ルプストーよ。よろしくね」

周りの男共から歓声が上がる

「すっげーあの胸!!」

大胆に胸のボタンをはずしているキュルケに男共からの熱い視線が集中。

反対に女子からは死線がおくられる・・・が、全く気にしないキュルケであった。

次はタバサの番になり

「・・・タバサ・・・」

そう言ってタバサは座った。

「」「」「・・・」「」「」

周囲が鎮まった。

「はあはあ、お人形にみたい、部屋で飾りたいな」

一部危険な発言が!!

次の瞬間、その男は教室の壁に氷の刃でつながれることになる・・・

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ」

あれがヴァリエールの三女かという声が聞こえてくる

最後に

「アレル・ラ・フォン・ランカスターです」

そう言って笑顔で挨拶する。

「はうっ！！」

「付き合ってっ！！」

「あいつは男、あいつは男・・・」

「（いろいろな人がトリステインにいるな・・・本当に・・・）」

笑みを絶やさずアレルは席に座る。

「それでは本日はこれからあなたが学ぶことを簡単ですが、担当の先生に説明していただく予定です」

どうやら、今日は授業らしいことはしないようだ。

「はっはやくお昼にならないかな・・・」

アレルはもう昼ご飯のことを考えている。

「「「あれだけ食ってもうお腹がすいたのか!？」」」

全員の共通認識

「？」

先生は知らないようなので首をかしげる。

それから、さまざまな科目の先生が自分の授業に対して熱心に生徒に説明していた。

そして

「私は『疾風』のギトー。風のスクウェアだ。今年の生徒のレベルはあまりに低い!!」

最悪の教師ということをみんな思った

「今年はドットがほとんどで、ラインが数名、トライアングルは一名で、スクウェアはいない。

そのトライアングルも水のトライアングルでしかも留学生のミスター・ランカスターだ」

一斉にアレルに視線が集中する。

「まったく、今年の生徒は不作だな。私が君たちぐらいの頃の者達は、ほとんどの生徒がトライアングルだった。

それに、スクウェアが何人もいた。その中でも私は早くから風のト

ライアングルとして、日々魔法技術を磨いたものだ。

さて、諸君なぜ『風』が最強であるといわれる所以は知っているかね」

ギトーは自分の得意な系統の魔法を自慢し始めた。

「それは単に私が『風』のメイジだからというわけではない」

「……（いや、思いつきそうだろ）……」

声には出さずクラスみんなの考えが一致した。

「さて、ミスタ・ランカスター。君は水のトライアングルらしいが『水』が『風』に勝つことができない理由を知っているかね？」

『水』は攻撃より防御や治癒系の魔法がほとんどなので、そもそも『風』は攻撃魔法が多いから全く逆の性質なのだ。

それを比べるのはおかしいが、ゲルマニアの野蛮人の生徒がトリステインの生徒より優秀であることに、ギトーは納得がいかなかったのでアレルに質問を投げかけたが

「ZZZZZZZZZZ」

アレルは、ギトーの話が長いので眠っていた

「……」

「ふふふ、私の話の最中に居眠りをするなんて……」

そう言つて、ギトーは杖を出して呪文を唱え

「エア・ハンマー!!」

見えない空気の塊がアレルに向かっていった

「キヤー」

生徒の一人が叫んだ

しかし、ギトーの放った魔法は突然現れた水の壁によって防がれた。

「なっ!!」

自身の魔法が防がれたのを見てギトーは思わず声をあげる。

「……何のまねですか？ミスタ・ギトー」

教室中が鎮まりかえった。

「無防備な生徒に魔法を放つことが教師のすることですか？」

「ぐっ……」

アレルの言うことに反論できないギトー。

「・・・先ほど先生は『水』は『風』には勝てないと言っていましたよね？」

「・・・ああ、そうだ」

「では、先生の『風』魔法はどうして僕の『水』魔法で防げたんですか？」

馬鹿にするようにアレルはギトーに言う

「なっ！！」

メイジが長い詠唱をするのとしないとでは魔法の威力が全く違う

詠唱が短ければ、同じ魔法でも威力が落ちるし逆に長い詠唱は威力が上がる

メイジの魔法は『火』、『水』、『風』、『土』の4系統がある

各メイジはいずれか一つの系統を得意とし、その系統の使い手と呼ばれる

魔法の熟達により複数の系統を使いこなすことも出来る。

同時に系統が増えるにつれドット（1系統のみ）

ライン（2系統、又は一系統の2乗）

トライアングル（3系統）

スクウェア（4系統全て）の使い手と呼ばれる

それなのにギトーの放ったスクウェアの魔法をトライアングルのアレルが防いだのだ

「本当にスクウェアなんですか？」

黒い笑みを浮かべるアレルにギトーは

「なんたる屈辱！！ミスタ・ランカスター表に出なさい！！」

真っ赤になりながら、アレルに言うギトーを見て

「いいですよ、退屈していたところですし」

アレル自身もやる気まんまんだ

「おっ、おい、やめなよアレル」

ギーシュが話しかけてきた。

「いいじゃないか」

「トライアングルの君がスクウェアの先生に勝てるはずないだろう
！！」

「そうでもないさ、要は戦い方だよ」

「よろしい、君に『風』の魔法について特別授業をしてあげよう。
広場に來たまえ」

そう言つてギトーは出て行つた

「じゃあ、行つてくる」

そう言つて、アレルは広場に向かつた。

「あ、あ・・・どうすれば・・・」

ギーシュはおろおろしていた。

「ふふふ、面白そう」

キュルケはつぶやいた。

「・・・」

無言で広場に向かうタバサ。

他の生徒も広場に向かつていった。

授業開始（後書き）

まだまだ、続くよ

決闘前（前書き）

まだまだ続く・・・

決闘前

マチルダ s i d e

「あんの、クソじじいが!!」

美しい? 鬼がいた?

マチルダの仕事は学院長のオスマンの秘書なのだが、オスマンはマチルダの尻をなでたり、自分の使い魔を使ってスカートの中を見たり……

セクハラをしてくる……

もちろんマチルダはオスマンにきついお仕置きをしているのだが、その行為は一向に無くならない。

「あゝ!! 今度ゴーレムを使って潰してやろうか!!」

……かなりストレスが溜まっているようだ。

さらに、この学園の男の教師から下心が丸見えの誘いをマチルダは何度も受けている。

コルベールとか、ギトーとか……

コルベールは食事に誘ってくるくらいだが、ギトーは自分が貴族で『風』のスクウェアということを理由でマチルダに肉体関係を強要してくる。

マチルダはまだ20代だがハルケギニアでは十分いきおくれの年なのだ。

それでも、マチルダの容姿はかなり美人の部類に入る。

長い緑色の髪と柔らかな物腰、男心を揺さぶる豊満な胸……

たまにオスマンはその胸を揉もうとしてくるが……マチルダの回し蹴りが後頭部にヒットして床とキスすることになる。

ギトーはマチルダを無理やり自分の部屋に連れ込もうとしたことがあるが、マチルダの蹴りをくらってダウンした。

幸いなことに、その時の記憶がギトーはなくなっている。

マチルダはオスマンの秘書という立場だが、貴族ではなく平民なので貴族の命令に逆らうことは本当はできないが……

相手の後頭部を回し蹴りすることで記憶を奪う技術を会得した。

「はあ、何やってるんだろ」

自分がこの学院に来た本当の理由を思い返しながらため息をつくマチルダであった。

前のほうからコルベールが慌てて走ってきた。

「あら、コルベール先生どうされました？」

瞬時に顔に笑顔を浮かべコルベールに話しかけるマチルダ。

「あつ、ミス・ロングビル。どうしたもこうしたもありませんよ」

コルベールはかなり焦っているようだ。

「？」

「ミスタ・ギトーが生徒の一人と決闘もどきを始めようとしているんです」

「!?!」

本来、貴族同士の決闘は校則で禁じられている。

学院の教師が校則を破っては生徒達に示しがつかない。

「至急、オールド・オスマンに取り次いでください」

「わかりました。こちらに」

マチルダはコルベールと一緒に学院長室に向かった。

コルベールと共に学院長室に向かう途中

「それにしても生徒と決闘なんて・・・」

「ミスタ・ギトーは授業の一環だと言っていましたか・・・」

学園内では基本的に貴族同士の決闘は禁止されている。

「その生徒はいつたい誰なんですか？」

「ゲルマニアの留学生のミスタ・ランカスターです」

「！！アレルですって！？」

思わず声をあげてしまう

「？ミス・ロングビル？」

「い、いえ、なんでもないです」

「とにかく、はやく何とかしないと」

「・・・」

マチルダは考え込む

昔からアレルは少し抜けているところがあるが、しっかり者であることをマチルダは知っている。

そのアレルが教師と決闘なんてするだろうか？

「・・・コルベール先生」

「はい、何でしょう？」

「決闘に至った経緯をご存じで？」

「えーと、何でもミスタ・ギトーが居眠りをしていたミスタ・ランカスターに攻撃魔法を放ったそうで」

「教師が生徒に攻撃魔法を放ったんですか！？」

「ええ、私はそう聞いています」

まだ入学したての一年生に対して攻撃魔法なんて放ったら下手したら死ぬ

それも無防備の生徒に対して

明らかに、ギトーの暴走行為だ

しかもそれがアレルであるということはギトーはかなりまずい状況にある。

アレルは身分を隠しているとはいえ他国の王族なのだ。

下手したら外交問題に発展する。

もし、ゲルマニアが攻め込んできたらほんの数日でトリステインという国は地図上からなくなるだろう。

マチルダはアレルの部屋で話をした時に、本当の身分についてアレル自身から教えてもらったので、今どんなにまずい状況を、よくわかっている。

「・・・まずいですね」

「もちろんです。先生と生徒が決闘なんてするなんて」

「そ、そうですね（この国がなくなっちまうよ）」

ようやく、学院長室に着いた。

「失礼します」

二人同時に部屋に入った。

「どうしたんじゃない？そんなに慌てて？」

のんきに煙草をふかしているオスマン。

「学院の一大事です」

コルベールはオスマンに訴える。

「何がじゃ？」

コルベールはマチルダに話したことをオスマンにも伝えた。

「・・・・・・・・やばい」

オスマンは真っ青になった。

考えていることはマチルダと同じこと。

トリステインがゲルマニアによって滅ぼされる光景が浮かんだ。

「・・・・・・・・わし自ら止めに行く」

そう言つてオスマンは勢いよく立ちあがる。

が、次の瞬間

ベきつ！！

いやゝな音が聞こえた。

「ぐゝぐあゝ」

オスマンは腰を押さえながら床で転げ回った。

「「オールド・オスマン！？」」

「「うつうつうつ、ぎっくり腰じゃ・・・」」

「この非常事態に何やっているんですか!?!」

「うっう、すまん・・・」

「早く回復魔法を!?!」

「それにはおよばん!?!」

「へっ!?!」

「ワシのぎっくり腰はあることをすれば治るのじゃ!?!」

「?それはいつたい?」

「なに、ミス・ロングビルの胸を揉めば治るんじゃないよ」

セクハラ発言をしてるし・・・

「なっ!?!」

自分の胸を隠すようにオスマンから離れるマチルダ。

「な、なんてうらやま・・・ごほんごほん」

本音が出ているぞ、コルベール。

「・・・」

マチルダからの冷たい視線がかなり痛い。

部屋の温度が急激に冷えてきた。

「・・・のう、ミスタ・ツルベール」

「私はコルベールです!!」

「そんなことはどうでもいいんじゃない」

「よくないですよ!!」

「そんなことより、あれ・・・」

オスマンの指をさした先に阿修羅が降臨していた。

「「・・・」」

オスマンとコルベールは大量の汗が流れてきた。

「・・・ふ・・・ふふふ」

極上の笑みを浮かべオスマンとコルベールをみるマチルダ。

「「ミ、ミス・ロングビル?」」

オスマンもコルベールも思わず後ろにさがる。

「お二人とも……覚悟はいいですね？」

オーク鬼ですら裸足で逃げ出してしまうようなプレッシャーをマチルダは二人に向けていた。

「「ひっ……た、たす」」

「問答無用です！！」

巨大なゴーレムの腕が二人をつかみ握りしめた。

「「ぎゃー！！」」

学院中に響き渡るほどの叫び声をオスマンとコルベールはあげるが、マチルダの『サイレント』によって誰にも聞かれなかったのは幸いだ……

「さて、ゴミ掃除も終わったしあたしが行くか」

そう言って、マチルダは広場に向かった。

その後、二人は新しい性癖に目覚めたとか目覚めなかったか……

マチルダ side out

決闘前（後書き）

新しい話を書きたいなあ
・
・
・

姉として（前書き）

「突然の告白」の中身をすこし変えます。

姉として

場所：広場

たくさんの生徒の中心にアレルとギトーが向かい合って立っている

アレルとギトーが決闘をすることは、すぐに学園中に広まった

他のクラスの生徒たちも退屈な先生の話より、こっちのほうが楽しいと思ひあつという間に広場には人が集まった

「さて、ミスタ・ランカスター。あくまでこれは特別個人授業であり、決闘ではない」

ギトーは学園内で貴族同士の決闘が禁止されているので、建前を一応述べた

「ええ、わかっています。トリステインのスクウェアクラスがいかにすごいかを僕自身、知りたいので」

アレルも問題ないようだ

「では、始めよ・・・」

と、言おうとしたとき

「待ちなさい!!」

マチルダが二人のところに來た

「これは、ミス・ロングビル。相変わらず美しいですね」

似合わないのに、キザッたらしくマチルダに話しかけるギトー

「あなたたち何をしているんですか!!」

「何といわれても、授業ですよ、『授業』」

ギトーはそう言いながらマチルダの方に近づき肩を抱きながら言った

「(さわんじやないよ!!)しかし、どう見てもこれは決闘ではないですか?」

「何、ゲルマニアとトリステインのメイジの力を生徒に教える目的もありますし、何より、野蛮人にトリステインの流儀を教えてやるのも教師である私の仕事ですから」

正論っぽく聞こえるが、ギトーは単にアレルをボコボコにしたいだけなのだ

「いいえ、だめです。すぐにこのようなことは止めてください」

「まあまあ、落ち着いて、ミス・ロングビル。そもそも君に私の授

業を止める権利はないのだから」

「くっ……」

マチルダはオスマンの秘書であるが平民なので貴族であるギトーを止めることができない

今、この決闘を止められるのは、同じ貴族の先生か学院長ぐらいなのだ

その、学院長はさっきマチルダによって潰れてしまった……

他の貴族の先生はスクウエアのギトーに強く言えず、傍観しているだけなのであてにならない

「（これだったら、あのはげ頭がいてくれれば……）」

コルベールも学院長と一緒に潰してしまった……

「でも、万が一、怪我でもされたら……」

「おや？そんなに私のことを心配してくれているのかな？ミス・ロングビル」

「……はっ？」

マチルダはアレルのことが心配でこの決闘騒ぎを止めようとしているのに、ギトーは自分のことを心配しているのだと勘違いしているようだ

「まあ、私が負けるなんてことはないから心配無用!」

「……………」

「すぐに終わらせるから待っていてくれたまえ、終わったらゆっくり話をしようではないか。二人きりで」

笑顔でマチルダを口説くギトー

「(何言っただいこいつは!!)え、遠慮します……」

と、マチルダは言うがギトーの中では、さっさと、アレルをボコボコにして、マチルダとあんなことや、こんなことをすることしか頭にない

「さあ、始めようか!」

鼻息を荒くしながら、アレルの方を向くギトー

「……………」

「……………」

アレルも周りの観客の生徒達もギトーに死線を送っている

「な、なんだ、その目は!」

「いえ・・・」

「その可哀そうな者を見る目をやめたまえ!!」

「ちょっと、アレル!!」

そう言つて、マチルダはアレルに話しかけた

「? なんですか?」

「あんた、何してるんだよ!!」

「先生との決闘が?」

「わかつているならやめなさい!!」

「大丈夫だよ、別に殺したりしない」

「こ、ころ」

マチルダはアレルの口にしたことに驚いた

「いかなる理由があるにしても、僕の妻になる娘の姉であるマチルダに手を出そうとしている奴にはお仕置きをしないとね」

いたずらっ子のような顔で、マチルダに小声で言う

「（姉か・・・）」

マチルダはアレルがテファのことを昔から好きな事を知っていた・

そして、それは彼女の初恋が叶わぬということ・・・

「じゃあ、殺ってくる」

そう言つて、アレルはギトーの方向かつて行つた

「・・・まったく・・・」

マチルダは昔より成長したアレルをみて思わずため息をつく。

「テファが好きなんだよね・・・まったく、天性の女つたらしだね」

複雑な気持ちではあるが、自分の義妹の幸せを願う。

そして、弟の成長した姿をうれしいと思うマチルダであった。

姉として（後書き）

マチルダの恋は実らない・・・

書いていて、切なくなった・・・

アレルVSギトー(前書き)

決闘

アレルVSギトー

マチルダから離れ、アレルはギトーと対峙した

「君はミス・ロングビルと何を話していたのだね？」

少し機嫌が悪そうにアレルに聞くギトーに

「なに、たいしたことではないですよ」

「・・・まあ、いい、では始めよう」

「ええ、殺りましょう」

そう言って二人とも杖を構え

「私はギトー。二つ名は『疾風』のギトー。風のスクウェアだ」

決闘は互いが名乗り上げることから始まる

「僕はアレル。二つ名はまだ決めていません。水のトライアングルです」

「「「「・・・」」」」

ギャラリーも固唾をのんで見守る

「では、こちらからいくぞ！ー！」

そう言つてギトーは詠唱を始める

「ウィ・・・」

「おそいー!」

そう言つてアレルは杖に魔力を込め、杖先にブレイドをまとわせ、ギトーに斬りかかる

「つく!?!」

ギトーはその場で詠唱をしていたので、突然のアレルの動きについて行けず、喉元にブレイドを突きつけられる

「「「・・・」」」

周りのギャラリーもアレルの予想外の動きについて行けずに黙ってしまう

「・・・勝負ありましたね」

ギトーに突きつけたブレイドを下げ、アレルはそう言った

「・・・」

ギトーは茫然とした

「（自分が負けた？たかが学生に？スクウェアの私が・・・）」

自分の魔法に絶対の自信があったギトーは始まって一瞬で決着がついたことが理解できずにいた

「やっぱり、ゲルマニア人は野蛮だな」

生徒の一言でギトーは正気を取り戻した

「『そうだ!!』『』」

複数の生徒がアレルの行為を非難し始めた

「（全く、トリステインの貴族は・・・）」

ため息をつきながら、アレルはその生徒達の方を向いた

「私の戦い方のどこが野蛮なのですか？」

「ミスタ・ギトーが詠唱中なのに攻撃したところだ!!」

「はっ？」

「それでも、君は貴族か？」

「・・・」

「正々堂々と勝負をしないなんて、これだからゲルマニアの野蛮人は・・・」

「・・・あなたは馬鹿ですか？」

「なっ!？」

アレルの発言に非難をした生徒は顔を怒りに歪ませた

「どこがおかしいんだ!！」

「戦いの最中に、敵に詠唱する時間を与えるのですか？」

「……」

「ミスタ・ギトーは無防備に止まって詠唱をしていたのですよ。戦場で敵は相手の詠唱が終わるまで待つてなんてくれませんよ」

「……し、しかし……」

「トリステインは伝統を重んじる国だそうです、敵国のメイジの詠唱が終わるまで待つのですか？」

「そ、それは……」

アレルが言うことは正しい

敵の魔法詠唱を待つなんてことはしないのが普通であるということだ

アレルは騎士団を率いた戦いで無防備に立ち止まり、魔法の詠唱をしているメイジを何人も殺したことがあるのだ

「ミスタ・ギトーは詠唱する時に、無防備にも立ち止まったから隙

ができ、僕に負けた。ただそれだけのことです」

「「「・・・」」」

アレルを非難していた生徒は黙った

「はあ、そんなに今の勝負が気に入らないんだったらもう一度やりますか？」

「・・・私をなめているのかね？」

ギトーは怒りの表情を浮かべアレルを睨んだ

「いえ、なんだか今の戦いに納得のできない人が多いようなので、それにミスタ・ギトーも納得していないんでしょ？」

アレルの言うことは正しいのだが、ここにいる生徒達は戦いを経験したことがあるものは、ほとんどいない

キュルケやタバサはアレルが言うことが正しいと分かっているが、大部分の生徒はアレルの戦い方に対して不満がある

特にルイズは先ほどからアレルの行動が気に入らなくてイライラしている

「（あんなのが私達と同じ貴族なんて信じられない！！）」

と、思っている

「では、次はトリステイン風にミスタ・ギトーの詠唱を待ってから始めましょう」

「・・・ふふふ、（後悔させてやる）」

不気味に笑うギトーは再び杖を上げる

「後悔はしないでくれたまえ・・・」

そう言つて詠唱を始めるギトーに

「ええ、どうぞゆっくり詠唱してください」

笑顔でギトーを挑発するアレル

「その言葉、後悔させてやる！！」

そう言つて、ギトーは詠唱を完成させた

「・・・『遍在』か」

アレルの目の前には、ギトーが3人いた

風のスクウェアが使うことができる魔法の一つで、それぞれが意思を持ち行動する魔法だ

精神力が多いほど作り出す遍在の数は増えるがそれに比例して大きく精神力を消費する

「（たつた、三人かよ）」

アレルは、あまりにギトーが情けなく思えた

「「「はあはあ、これで終わりだ!!」「」」

作り出した遍在もへばっているが、

アレルに『ブレイド』を使って斬りかかってきたり、
『エア・ハンマー』を放ってきたりする

「・・・（仕方ない、少し本気を出すか）」

ギトーの攻撃をかわしながらアレルも杖をふる

「「「もらった!!」「」」

三人のギトーが『ブレイド』でアレルを突く。

「「「なっ!?!」「」」

アレルの身体にブレイドが突き刺さる

「キヤー」

生徒の悲鳴がギトーにも聞こえてくるが

「（しまった・・・）」

自分が生徒を傷付けてしまったことにギトーは動揺している

「は、はやく、治療を！！水のメイジは！！」

マチルダでさえこの状況に気が動転していた

「（アレルが、アレルがやられるなんて・・・）」

そう言っつて、水のメイジである生徒とアレルのもとに駆け寄ろうとするが

突然アレルの身体が霞のようになり、消えた

「「「えっ！？」「」」

周りの生徒達もアレルが消えてしまったことに驚き、アレルを探した

「やれやれ、まだ、“授業”は終わっていませんよ、ミスタ・ギト
」」

姿が見えないのにアレルの声が聞こえてくる

「「「ど、どこにいるー！！」「」」

ギトーもあたりを見回すが、アレルは見当たらない

「ああ、失礼、姿を消したままでした」

突然アレルが現れる

「「「なっ、何だ、その魔法は？」「」」

今まで見たことがない魔法をアレルが使うことに恐怖を感じるギトー

「ああ、これ『ミラージュ』（蜃気楼）と言う魔法です」

「……そんな魔法は見たことがない」「」

「当然ですよ、僕が作ったオリジナル魔法ですから」

さも、当然とばかりに言うアレルにギトーも周りにいる生徒達も驚く
なぜなら、オリジナルの魔法を作るのは非常に難しいからだ

既存の魔法は比較的簡単に覚えることが可能だが

新たに魔法を作るとは、長年メイジとして研究を重ねた者のみが
到達する領域なのだ

新魔法は、100年に一つできれば良いほうで、

それでも、新しくできた魔法は使い勝手が良くないものが多い

しかし、アレルが使った魔法はそんな風には見えない

ギトーや周囲の生徒達をだますほどの完成度がある魔法なのだ

「……いったい何なんだ？その魔法は？」「」

教師であるギトーですら、理解できない魔法

「簡単に言えば、水の魔法でこの周囲の空気の密度を急激に変えて、光を異常屈折させただけですよ」

「「「「「？」「」「」」

ギトーも生徒も分からないようだ

「そして、この魔法を応用すると――」

そう言つてアレルは杖をふるう

「「「「「！？」「」「」」

アレルが10人に増えた

「「「へ、遍在か？」「」」

「いえ、違います。そうですね・・・『シャドウ・ミラージュ』とでも言いますかね」

10人のアレルがギトーの『遍在』のように同時に言う

「まあ、『遍在』の『水』版ですかね」

考え込むようにアレルはギトーに言う

「「「「「・・・（これで、本当に『水』のトライアングルなのか？）」「」」

当初の目的はすでにギトーの中では無くなっていた

あまりに、アレルが規格外の生徒であることをギトーも周りの生徒も理解した

「さて、続けましょうか」×10

10人のアレルが杖を構えた

「……（勝てない……）」

すでに、自分がアレルにかなわないことを、ギトーは理解している

「……（しかし……逃げるなんてことはしない!!）」

ギトーも杖を構えた

「これを見て、まだ戦うのですか……いいでしょう、ミスタ・ギトー。」

あなたの最強の呪文を僕に放ちなさい」

「……情けか？」

「いいえ、あなたのその行動に敬意を払っただけです」

そう言って、笑顔でギトーに話すアレル

「……いいだろう、私の本気を見せてやろう」

そう言って、三人のギトーは詠唱した

「『これが私の全力だ！！ライトニング・クラウド！！』」

強力な風系統の魔法である雷（電撃）がアレルに向かう

アレル達の目の前に水の壁が現れ、それにギトーの放った攻撃があたり、周囲に水蒸気が発生した

「はあはあ」

ギトーはすでに精神力のすべてを使い果たし、遍在も消えていた

「はあはあ、これでどうだ」

発生した水蒸気でアレルの姿は見えないが、ギトーの攻撃は間違いなくアレルに当たった

だんだん、水蒸気が消えてなくなり、そこには無傷のアレルが立っていた

「なかなか、いい攻撃でしたよ」

と、アレルはギトーに言う

「では、僕の番ですね」

10人のアレルの杖の先から水色の魔力が空の方へ延びていったんだんと雲が集まってきた

「頑張つて受けてくださいね」

雲の中から水色の巨大な龍が現れた

その龍からは巨大な力を感じる

その龍の口に光が集まる。

「アクア・ブレス」

水色の光線がギトーに放たれた。

「ギャー」

ギトーの叫び声が響く

「……………（死んだんじゃない？）」……………」

アレルの作り出した龍から放たれたブレスはそこら辺の龍なんて比較にならない威力だ

煙が晴れてぼろぼろのギトーが現れた

どうやら、気絶しているようだ

「……………（無事なのか？）……………」

「安心して、寸止めだから」

笑顔で言うアレル

「「「（絶対違う！！）」「」」

「一応、回復させとくか」

そういつて、ギトーに杖をふる

水色の光がギトーを包み、みるみる傷を治す

「「「「えっ！？」「」」」」

アレルは秘薬を全く使わず、ギトーの傷を一瞬で直した。

水のメイジ達は、アレルが使った回復魔法が、自分達の使うものと何かが違うことに驚いた。

「これで、大丈夫と」

レビテーションでギトーを浮かべて医務室に向かうアレルの後ろ姿を見た生徒は後日

「「「（アレルを怒らせないようにしよう）」「」」

と、いうことが決まったらしい

この事件は後に「水帝の怒り」と言う伝説になり、トリステイン魔法学院に代々語り継がれることになる

「・・・」

ルイズはアレルがギトーにかけた回復魔法が秘薬を使わずあればど

の怪我を直したことに驚いた。

周りにいた生徒が、アレルの使った回復魔法について議論し合っているのが聞こえてきた。

それを聞いたルイズは、「……もしかしたら、あいつの魔法だったら、ちい姉さまも……」

そうつぶやいた

アレルVSギトー（後書き）

最後を変えました。

ゲルマニアの姉（前書き）

ハーフェルフの皇太子の「キュルケ」の内容を変えた話です。

ゲルマニアの姉

ギトーとの決闘から数日がたった

「シエスタ、紅茶とケーキおかわりちょうだい」

「はい、ただいま」

午後の優雅なひと時

アレルは校庭で優雅に午後のティータイムを過ごしていた

「・・・しかし、本当にアレルはよく食べるね・・・」

アレルと同じ席で一緒に紅茶を楽しむギーシュが言う

「マルトーさんのケーキは絶品だからね」

シエスタからおかわりのケーキを貰い嬉しそうなアレル

「やれやれ、これがあの『水帝』の二つ名を持つものとは・・・」

アレルとギトーの決闘後、周りの生徒が勝手にアレルの二つ名を『

水帝』と呼ぶようになった

「みんなが勝手につけたんじゃないか、その二つ名」

本当のアレルの二つ名はあるのだが、身分を隠している以上、それを使うことができないのは、仕方がない。

先ほどから、アレルとギーシュの座る席の方に、周りの女子生徒から熱い視線が集まる

あの決闘以降、アレルの学院での人気はうなぎのぼりなのだ

ギトーからセクハラを受けた女性陣、特にメイドからの支持が多い
アレルの平民を差別しない言動も平民から多くの信頼を勝ち取っている

「あつ！ケーキがもうない！！」

おかわりのケーキも食べてしまったアレルはしょんぼりした顔をする

「……はうつー！！」

そんなアレルを見た女性陣の母性本能をくすぐる

「失礼、ミスタ・ランカスター」

「うん？」

顔を上げると、赤い髪的女子生徒が眼の前にケーキののった皿を置いた

アレルの眼がきらきらと光った

「よろしければどうぞ」

「いいの！？」

「ええ」

「ありがとう」

満面の笑みを浮かべケーキを食べるアレル

「「「はふん」「」」

さらに女子生徒の母性に直撃するようなことを無意識にやるアレル

「喜んでくれたかしら？隣、よろしいかしら？」

「いいよ」

「僕もかまわない」

アレルとギーシュも同意する

「え〜と、君は確か・・・」

ギーシュが彼女を見ながら言う。

「キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーよ」

「ああ、ゲルマニアからの留学生だったけ」

「（うまうま）」

まだ、クラスの生徒の名前を全員覚えていないアレル

しかし、アレルは彼女のことをよく知っていた。

「どうして僕に声をかけたんだい？もしかして僕の美貌が君を引きつけたのかな？」

ギーシュがキュルケの前で髪をかき上げながら言う。

「あら、興味があるのは、その彼よ。最近有名な『水帝』に興味がない人はいないと思うのだけど」

「ははは（僕じゃないのか・・・）」

どうやら彼女の目的はギーシュではなく、ケーキを食べているアレルのようだ。

ギーシュは落ち込む。

「そうなの？」

アレルがケーキをから視線をキュルケに向ける。

「そうよ」

「ふん」

「そりゃ、生徒が先生を負かしてしまうなんて話を聞いたらね・・・」

ギーシュは目の前でケーキを食べるアレルにあきれながら言う

「（くそ、僕だって・・・）」

内心アレルに対して対抗意識を向けるギーシュだが勝てる要素がな

いので黙る

「うふふ（大きくなったわね）」

キュルケはアレルを見ながら思う。

「ミス・ツエルプストーはゲルマニアの出身だったよね？」

ギーシュがキュルケに話をふる

「ええ、そうよ。ミスタ・ランカスターと同じね」

「へえ、またどうしてトリスティンに？」

「実家から逃げてきたのよ」

「へっ？」

「ミス・ツエルプストー、それは何故だい？」

「じゃあ、キュルケはなんで実家から逃げたの？」

アレルはキュルケに聞く、彼は最初からキュルケの事を呼び捨てにしている。

「家の親が私を無理やり結婚させようとしたのよ」

「へ、別に普通のことじゃないか？」

貴族が若いうちから結婚するのはハルケギニアでは当たり前のこと

なのだ

早くに結婚しその家の跡継ぎを生むことは貴族の女にとって、重要な役割である

「・・・60歳を超えるお爺ちゃんとも？」

「・・・・・・・・」

「（年の差がある結婚はよくあることだが、さすがにそれだけ離れていると・・・）」

さすがにアレルもこの結婚をキュルケが嫌がるのは無理ないと考えた

「さすがに年が離れすぎだね・・・」

「確かに・・・」

「本当よ、全く。いくら、ゲルマニアで実力がある貴族らしいけどね、年がね・・・」

「（ツエルプストーおじさんは何をやっているんだか）」

キュルケの父親とはパーティや軍事の会議でアレルは何度も会ったことがある

それに、アレルはキュルケとも親交があった。

ゲルマニアで幼い頃、アレルはキュルケと一緒に過ごしたことがある。

彼女は皇太子であるアレルの世話役をしていたことがある。

「（典型的なゲルマニア人だもん仕方がないか。ゲルマニアが「成り上がりだ」とか「野蛮」とか言われる所以は完全な実力主義の社会なのだからしょうがないが、自分の娘まで道具として使うか？」

そう考えながら、ふと思い出した

「そうそう、ミスタ・ランカスター」

「（なんで？）アレルでいいよ、キュルケ」

「あらそう？じゃあアレル（やっぱりこっちの方が良いわね）」

最上級の笑みを浮かべながらアレルの手を握るキュルケ

「ええと、2人は知り合いなのかい」

「ええ、同じ国の出身だからね（少しからかつちゃおう）」

「ねえ、ダーリン」

キュルケはアレルの呼び方を変える。

「！？」

「ぶっ！？ごほごほ」

すっかり、蚊帳の外状態のギーシュが紅茶を噴出した

「？」

「ふふふ、私の二つ名は『微熱』なの。いい男は大好きよ」

「ははは、それは光栄だね、キュルケ。でもね」

そう言つて、アレルはキュルケの後ろを指さす

「？」

キュルケが振り返ると後ろに数人の男子生徒が立っていた

「キュルケ、僕との約束は？！！」

「おい、何言っているんだ、彼女は僕と約束したんだ！！」

「違うよ、ぼくだ！！」

Etc…

「え」と

アレルの方を向くキュルケ

「なるほど、『微熱』の二つ名はこういう意味なんだ」

「いいえ、彼らとはお友達の関係だけなのよ」

「（なんだか、男共が一斉に自分が恋人だと主張しているんだが）
そうなんだ」

自称キュルケの恋人達は殴り合いを始めた。

笑顔を崩さずキュルケと話す

「ゆつくりお話をしようかしら、部屋で」

あと少しで唇と唇が触れそうな距離で話すアレル

「「「貴様！！彼女から離れろ！！」」」

「やつ、キュルケがよってきたんだけど」

自称、キュルケの彼氏達がアレルに杖を向ける

「じゃあ、行きましょう」

キュルケはアレルの腕に自分の胸を押しつけながら歩きだす

「「「無視するなー！！」」」

三人から『火』『風』『土』の魔法が放たれる

「まったく」

そう言つてキュルケを抱き上げる

俗にいうお姫様抱っこをして、アレルは足に風の魔力を込め飛び上がる

「／／／／／／／／」

アレルにお姫様抱っこされている、キュルケの顔は真っ赤
ゆっくり、着地するアレルとキュルケ

「やれやれ、トリステインの男はレディのエスコートも満足にできないのかい？」

キュルケをおろしながら魔法を放った貴族に言う

「はん、これだから野蛮人は」

また、ゲルマニア人だからという理由だけでアレルを馬鹿にする

さすがのキュルケもむっとした表情になる

「……」

「言いたいことはそれだけかな？じゃあ、キュルケ行こうか」

「そうね」

二人はそう言って歩き出す

「おい、まだ終わっていないぞ！！」

「野蛮人なんだろう？君たちからしたら、僕もキュルケも」

「「「あつ……」」」

「そうね、熱も冷めてしまったわ」

「「「うつ・・・」」」

「僕を無視するのは伯爵家を敵にすることでもいいんだな!!」
約一名、負けず嫌いがいた。

「だから？」

「なに!!」

「自分じゃ勝てないから、親の権威を振りかざすんだ」

「なんだと!!」

「君が親の権威を使うのなら、僕の家は侯爵家だよ」

「・・・」

「伯爵家の君が侯爵家の僕を非難していいの？」

男は黙ってしまった。

「じゃあね」

再び歩きだす

「・・・く、くそ」

一人が悪態をつき、そして

「こんな礼儀知らずの奴の親なんてたいしたことないだろ」

「ああ、たぶん彼の親は薄汚い平民だろ」

「そうとも、誇り高い貴族のはずがない」

「はは、もしかしたら、貴族の側室の子かもな」

「そうだな、平民の女なんじゃないか」

アレルに対する誹謗が両親の誹謗中傷に変わる

「……言いたいことはそれだけかい？」

先ほどからアレル達のやり取りを見ていた生徒たちは彼らの近くから離れる

アレルの顔は笑顔だが、目から光が消え、その生徒達を見据えた。

「僕自身についての悪口であれば、許そう……だが……」

アレルから膨大な魔力がにじみでる

「……ひっ」

三人はようやく自分が誹謗していた相手の力の強さを本能的に理解した

慌てて、逃げようとするが足がすくんで動けない。

「・・・僕の両親を侮辱するのは許さない!!」

「ちよつと、アレル」

キユルケがアレルに声をかける

「なんだい？」

「私も手伝うわ」

笑顔でアレルに言う

「ふふふ、そうだね、じゃあいつしよにお仕置きするか」

「ふふふ、そうね」

キユルケも杖を出して構える

「キユルケ」

「なに？」

「ちよつとおもしろいことをするから手伝って」

「? いいわよ」

「じゃあ、ちよつと失礼」

そう言つてキユルケの手と自分の手を絡める

「えっ!？」

突然のことでキュルケは驚く

「じゃあ、いくよ」

そういうと、アレルはギトーとの決闘では使わなかった『風』の魔法を練る

「キュルケは『火』の力を練って」

「ふふ、わかったわ」

キュルケはアレルの支持通り、『火』の力を練る

「『なっ、何をする気だ?』」

二人の練り上げた精神力が絡みあった手から溢れ、空中で混ざり合う

全てのものを燃やしつくす『火』

全てのものを吹き飛ばす『風』

二つの属性が混ざり合い、巨大な竜巻を作り上げる

『風』のスペルである魔法に似ているがその竜巻からは荒々しい炎がみえる

「合成魔法だよ『火』と『風』の」

「ヘクサゴンスペル？」

ハルケギニアの王家の者同士が扱うことができる魔法

その魔法は反則的な威力で王族の者でない者は打てないとされていた

「（やっぱり彼は・・・けどゲルマニアに始祖の血はないはず）」

キュルケの言う通りトリステイン、アルビオン、ガリアには始祖の血が流れているがゲルマニアには始祖の血は流れていない

王家にしか許されない魔法を平然と使っているアレルにキュルケは首をかしげる

「うーんとね、王族しかヘクサゴンスペルが使えないっていうのは間違いだよ」

「そうなの？」

「うん、精神力の波長が似ている人だったら使えるよ」

「あら、じゃあ、あたしとダーリンはそうなんだ」

キュルケは嬉しそうに言う

「そうだね（本当は僕がキュルケに波長を合わせているからなんだけどね）」

本当は違っらしい

「さて」

アレルの両親を侮辱した生徒の方に顔を向ける

「「「ひっ……」」」

顔面蒼白でアレルとキュルケを見てくる馬鹿共

「「じゃあ、逝ってらっしゃい」」

二人から最上級の笑顔をもろう

「「バーニング・ストーム」」

その魔法は馬鹿三人を飲み込んだ

「「「ギャー」」」

「「「……」」」

ギャラリーもアレルが規格外すぎることに驚いた
それから、馬鹿三人がぼろぼろになって落ちてきた

「じゃあね（ようやく、キュルケと話ができるよ）」

馬鹿三人を放置して行ってしまうアレルとキュルケ

馬鹿三人はこの後、アレルとキュルケに復讐を企てるのだがその話はまた今度に

ゲルマニアの姉（後書き）

次の話も少し変ええいます。

偏見（前書き）

ハーフェルフの皇太子の「偏見」の中身を少し変えています。

偏見

場所：アレル自室

馬鹿貴族を締め上げた後、アレルとキュルケは男子寮最上階のアレルの部屋に行った

部屋に行く途中周りから視線が痛い

アレルはキュルケを狙う男子から視線

キュルケはアレルを狙う女子からの視線

二人ともゲルマニア人でありながら、学院内でトップの人気を誇る部屋に入ってからキュルケはアレルの腕に抱きつき自分の胸を押しつけていた

「ねえ、キュルケ」

「なあに？ダーリン」

「いつまで、抱きついているの？」

「ずっとよ」

ベツトに腰掛けながらアレルとキュルケは話す

「キュルケ、ここは男子寮の僕の部屋だよ」

「そうね。私とアレルの『愛の巢』ね」

「（おいおいまだやるか）ははは」

「も」

先ほどより強く胸を押しつけてくるキュルケ

「（やれやれ）あ、こんなことをされても？」

そう言つてアレルはキュルケをベットに押し倒す

「……」

「キュルケって良い匂いがするね」

「そ、そう？」

アレルはキュルケの髪をなでながら言う

「ねえ、キュルケ」

「な、なに？」

「男の部屋に女が来るといふことがどういふことか分かるよね？」

「う、うん……」

「あ、あのね、アレル」

顔が真っ赤になってしまっているキュルケ

「うん？なに」

「そ、その…私、初めてだから…や、優しくしてね…」

「…うん」

だんだん二人の唇が近づき…

あと少しで二人の唇が触れそうな時

「…何やってるんだよキュルケ姉」

「痛っ！」

アレルはキュルケの額にデコピンをした。

「もゝ、何するのよ」

キュルケは額を押さえながらアレルに抗議する。

「全く、変らないねキュルケ姉」

先ほどの男達のことについて言う。

「でも、アレルだったのりのりだったじゃないの」

「……まあね」

2人は椅子に座りなおす。

「しかし、キュルケ姉がトリステインに留学するなんて聞いてなかったよ」

キュルケに紅茶を出しながら言う。

「ええ、私もアレルがいるなんて思わなかったしね」

キュルケは紅茶を一口飲む。

「恋人をつくるのもほどほどにしておかないと、いつか刺されるよ」

「あら、私の家は恋多き一族なのよ、仕方ないじゃない」

「……（本当に変らないね）」

しばらく、2人で談笑していると来訪者を告げるベルが鳴る

「誰か来たみたいだね」

「そうね」

アレルは鏡の所に行き、来訪者が誰かを確認した

ピンクの髪の少女が映っていた

「・・・ルイズか」

「・・・ヴァリエールですって!!」

「（ああ、そう言えば仲悪いんだっけ？家が）」

ルイズ side

「アレル!!! いるんでしょ!!! 開けなさい」

アレルの部屋の前でピンクの髪の少女がドアを何度もノックしている

ルイズはこの前アレルの見せた魔法が、病弱な姉カトレアに効くかもしれないと思わず男子寮に訪ねてきたのだ

「（なんで公爵家三女の私がわざわざゲルマニア人を訪ねなくちゃいけないの!!!）」

ここに来る前に何度かルイズはアレルに接触しようとしたが、ルイズ自身の取り巻き（主にヴァリエールの名に群がってきた貴族）に邪魔されたのとアレルに群がる女子生徒達によって上手く接触できなかった

「さっさと開けなさい!!!」

ゲルマニア人なんかに頭を下げるなんてことを本当はしたくないルイズ

ヴァリエール家とツエルプストー家の関係が悪いせいかゲルマニア人に差別的な考えをルイズは持っている

「（あゝ、魔法でドアを吹き飛ばそうかしら）」

メイドにアレルはいるかどうかを聞いたので、部屋にアレルは間違いない

「ふふふ、いるのは分かっているのよ。出て来ないなら・・・」

そう言っ杖を出し、呪文を唱えようとするルイズ

しかし、次の瞬間、扉の横にいた甲冑が動き出し、ルイズを持ちあげた

「きゃゝ、な、なにすんのよゝ!!」

ルイズは足をつかまれ宙づりにされる

足をつかまれた時、ルイズは杖を落としてしまった

手をバタバタ振り回して必死に甲冑の拘束から逃げようとするがふりほどけない

「何やってるの？」

ルイズの視線の先に扉が開き、中からアレルがルイズを見ていた

ルイズ side out

「なにやってるの？」

部屋の前で甲冑に逆さにつるされたルイズがいた

「見てないで、早く助けなさい！！」

必死に甲冑の拘束を解こうとする

「・・・ていうか、おさえなくていいの？」

「何を？」

「スカート」

「・・・はっ！！」

只今、ルイズは甲冑に逆さにされている

つまり、スカートの中が丸見えなのだ

「うっう、は、早く助けなさい」

スカートをおさえて、ルイズはアレルに言う

「（はぁ）はいはい、分かりました」

甲冑に指示を出し、ルイズを床に下ろす

「な、なんで、こんなものがあるのよ!」

元々いた位置に戻る甲冑を指さすルイズ

「あゝ、なんでも警備用のゴーレムらしいよ」

「なんで、こんなところを警備してるのよ!」

「ここが、特待生の部屋だからしいよ」

「あんた、特待生なの?」

「そうだよ」

「……」

ルイズはアレルがゲルマニアの留学生で水魔法がすごいぐらいの情
報しか知らない

「ちょっと、いいかしら」

アレルの後ろからキュルケが顔を出した

「な、な、な」

「「な?」」

「なんで、ツエルプストーの女がいるのよ!」

「「は？」」

場所を変えて、ただいま、アレルの部屋ではルイズがアレルの横にいるキュルケを机を挟んで睨みあっていた

キュルケは動じていないが

「さて、どんな御用かな？ミス・ヴァリエール」

「・・・話をする前に、その女を私の視界から消してくれない」

「あら、ずいぶんな事を言うのねヴァリエール」

「ふん、ゲルマニアの娼婦なんかが私の家名を呼ばないでくれる。汚れるわ」

「あら、そんなこと言っていると燃やすわよ」

「「ふふふふ」」

二人の視線がぶつかりあって火花が出てきている

「（あゝ、クッキーがうまいな）」

アレルは実家から送られてきたクッキーを食べながら二人の話を聞いている

「そんな、重りなんかいつもぶら下げて大変ね」

「あら、なさすぎるのもよろしくないわよ」

「（紅茶もおいしい）」

「な、なくても困らないわよー!!」

「あら、その大きさだと殿方を満足させることなんてできないわよ」

「（ふー）」

「うつ・・・でも、小さいのには小さいの良さが・・・」

「あら、それは是非教えてほしいわミス・ヴァリエール」

「「なによ」」

完全に來た目的を忘れているルイズ

「ねえ、アレル」

「うん？」

キュルケがアレルに話をふる

「やっぱり大きいほうがいいわよね？」

自分の胸を手で持ち上げ協調するキュルケ

「う、私だつて、ちい姉さまみたいになるんだから・・・」

「誰よ、それ」

「私の姉で・・・あつ!？」

何かを思い出したみたいだ

「「?」」

「アレル!! あんた、この前決闘が終わった時に使った回復魔法を教えなさい!!」

「「（人にものを頼む態度か?）」」

どこまでも相手を見下すように話すルイズ

「この私、ヴァリエール家の三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールに魔法を教えるなんて光栄なことなのよ」

「「（何言ってるんだ（よ））」」

「さっさと、教えなさい」

「（うゝん）いやだ」

「な、なんでよ!! この私ルイズ・フランソワーズ・ル」

「だって、人にものを頼む態度？トリステインの貴族って礼儀知らずなの？」

「なんですって！！」

「ゲルマニア人だから、そんな風に言うんでしょ？」

「・・・」

「凶星か」

「はあ、いい加減にしてほしいわよね」

キユルケも同意する

「・・・」

「用事がそれだけなら、帰ってくれるかな？」

「・・・そんなこと言っているのかしら」

「なんで？」

「・・・私はトリステイン公爵家の娘よ。」

「で？」

「私の家系はトリステインの王族と親戚関係なのよ」

「・・・」

「その私のお願い（命令）が聞けないのかしら」

「……………」

アレルとキュルケはあきれていた

「（…………）」

部屋の温度がどんどん下がってきた

「そもそも、野蛮人であるゲルマニア人が公爵家の娘のお願いを（命令）を受けるなんて名誉なことなのよ」

アレルの目つきがどんどん冷めていくのにルイズは気がつかず、自分の持論を並べる

「……言いたいことはそれだけか？」

「なによ！！まだ話はおわ……………」

ルイズはようやくアレルの様子が変わっていることに気付いた

「悪いが、お前のわがままに僕がつき合う義理はない」

「あなたはゲルマニア人でしょ！！ 私達トリステインの貴族より格下のあんた達がなんで私の言うことがきけないのよ！！」

「それだよ、その他人を見下す考えが気に入らない」

「はあ？何言ってるの・・・」

「それ以上わめくな！！ さっさとこの部屋から出て行け」

アレルの手には剣が握られ、ルイズの喉元に剣先が突きつけられていた

「ちょっとアレル！！」

アレルからは尋常じゃないほどの殺気が溢れ、ルイズはぶるぶると震えていた

「あ、あ、あんた・・・こ、こんなこと、して、た、だ、ですむとお、おつもってるの？」

アレルの殺気を真正面から受けているルイズはまともに話せない

「わ、わたしは、こ、こうしゃくけの」

「・・・ミス・ヴァリエール、お前が偉いのか？」

「・・・と、とうぜんでしょー！！」

「ミス・ヴァリエール、君はただの公爵家の三女だ。君は公爵夫人なのか？違うだろ？」

君はただの公爵の三人目の娘と言っただけだ」

「・・・」

怒りに顔をゆがませアレルをにらむルイズ

ルイズは公爵の娘だが三女だ

学院を卒業しても家督を継ぐことはできない

どこかの自分より地位の低い貴族の家に嫁ぐぐらいしかない

「学院の中では身分・国籍・人種に関係なく平等な存在ではないの
かな、僕らは。君が言っていることは、ダダをこねるガキと何ら変
わりはない」

すこし、殺気を弱める

「……」

ルイズは真っ青になりながら、床にすわりこんだ

「さて、お引き取り願おう」

「……覚えていなさい」

よろよろとルイズは立ち上がり出て行った

アレルは剣を鞘にいれた

「キュルケ姉」

「なあに、アレル？」

「君は、何故ルイズが僕の魔法を欲するか分かる？」

「えーと、病弱な娘が一人いるらしいってことは聞いたことがあるけど」

「そうか・・・」

「でもアレル、一応ルイズはトリステインの大物貴族の娘よ。大丈夫なの？」

もし、ルイズが今日アレルにされたことを公爵に伝えれば、問題になる

下手をすれば国際問題に発展する

「別に僕が他国の貴族の治療をする必要はないし（ヴァリエール公爵の次女とすると・・・面倒なことになるな）」

「（さて、公爵がどうでるか）」

アレルは考え込む。

偏見（後書き）

キュルケは主人公にとって、姉的な存在。

テファ&マチルダは幼馴染的な存在。

キュルケフラグは消えたな・・・

スレイプニールの舞踏会（前書き）

ハーフェルフの皇太子の「スレイプニールの舞踏会」と少し変えて
いるところ有り。

スレイプニールの舞踏会

スレイプニールの舞踏会。

それは、トリステイン魔法学院の伝統行事。

トリステイン魔法学院に入学した新入生達はこの舞踏会で社交場デビューをする。

社交場に不慣れな新入生に対して、その雰囲気慣れてもらうためのイベントでもある。

この舞踏会は普通の舞踏会とは少し違う。

真実の鏡という魔法道具で自分を理想の姿に変えて参加する。

ほとんどの生徒は自分の父、母、兄、姉などになることが多い。

また、母国の王族などになったりする者もいる。

全ての学年の生徒が姿を変えるため、誰が新入生で、誰が上級生な

のかが分からなくなる。

だから皆、積極的に相手に話しかける。

そして、気に入った相手がいれば、ダンスを申し込む。

その相手のことが気に入れば、互いに真実の名を教える。

この舞踏会で、多数のカップルができる。

なので、上級生も下級生の男子もこのイベントで女の子とお近づき
になろうと張り切る。

「順番にこのカーテンの向こうに来てください」

受付で並び、順番を待つ。

「しかし、君はどんな姿になるんだい？」

「うん。誰だろうね？」

アレルとギーシュは、カーテンの前で並んでいた。

「ギーシュは誰になるか分かるのかい？」

「ふふん、当然だよ」

髪をかき上げながら言う。

「へえ、それは楽しみだね」

「はは、期待してくれたまえ」

順番がきたので、ギーシュはカーテンをくぐっていった。

「次の方、どうぞ」

そして、アレルの番になった。

「鏡の前にたったら、目を閉じて、自分の理想の人物を思い浮かべてください。目を開いた時、あなたは、その思い浮かべた人物の姿になっています」

カーテンをくぐる前に先生に説明をつけた。

「これが・・・」

カーテンをくぐると、目の前に大きな鏡が置かれていた。

アレルはその鏡の前に立ち、目を閉じて自分の理想の人物を思い浮かべた。

アレルにとって理想の人物。

それは・・・

誰よりも強く。

誰よりも気高く。

誰よりも民を愛し。

誰よりも自分を愛してくれる。

現ゲルマニア皇帝

アルブレヒト三世

アレルの父であった。

「やっぱり、この姿か」

鏡に映る自分の姿をまじまじとアレルは見る。

そして、アレルはカーテンをくぐった。

そこは舞踏会の会場だった。

華やかな会場内では、様々な格好の人が談笑していた。

ある人は、自分の父や母。

ある人は、歴史上の偉大な人物。

ある人は、王族の姿。

特に多かったのは、トリスティンの姫であるアンリエッタの姿をした生徒が数人いた。

「豪華だな・・・」

周りを見渡し、アレルはつぶやく。

「やあ、アレルさっきぶり」

「・・・ギーシュか」

「よくわかったね」

「・・・変ってないじゃん」

アレルの目の前にいるのは、理想の姿？になったギーシュ。

「なんで変ってないんだ？」

「理想の姿！！それは僕自身に決まってるじゃないか！！」

ギーシュは自分の身体を抱きしめながらくねくねしている。

「・・・まあ、いいんじゃないか」

「で、アレルはその姿が理想の人物なのかい？」

「ああそうだよ」

「うん。なんだか狡猾そうな顔をしているね。誰なんだい？」

「僕の魔法や武術の師でもある人だよ（そして大事な家族だよ）」

アレルは幼い頃に、父から魔法・武術の基礎を教わった。

さすがに、現皇帝が常にアレルに教えられるほどの時間があつたわけではないので、後は皇宮内の魔法衛士隊などから教わった。

「へえー、アレルの師匠か。じゃあ、かなり強いんだろう？」

「うん。剣だけで100人以上のメイジをふっ飛ばすからね」

皇帝はアレルと模擬戦をする時、ウォーミングアップと称して、魔法衛士隊と一対多数をする。

「はははははは！貧弱！貧弱！貧弱！」

剣を握ると普段は温厚なはずの父は性格が変わった……

そして、現役の魔法衛士隊に襲いかかる。

そして、圧倒的な力で相手をねじ伏せていった。

[illegible]

模擬戦前に鍛錬所は屍？で埋もれる。

そして・・・

『さあ息子よ！！楽しみではないか！！』

目をぎらぎらさせ、返り血？を浴びた父が剣を構え襲いかかってくる……

「そ、それは、すごいね」

「ああ、剣術だけでそれだからね……さすがに魔法も使われるとかなりきついよ」

前線から身を退いた父であるが、今でもその強さは健在である。

今でこそアレルは父に勝てるが、幼い頃は父の攻撃から逃げ回っていた。

今では、いい思い出である。

「トラウマになりそうだね……」

「そうかい？」

しばらくギーシュと談笑していると、急に会場が暗くなった。

生徒達が騒ぎ出す。

「静粛に!!」

舞台の一か所が照らされ、オスマン学院長が表れた。

「新入生の諸君、ようこそ!!ようこそスレイプニールの舞踏会へ。
今宵は身分を気にせずに楽しんでくれたまえ」

そして、オスマンはカーテンの向こうに消え・・・

カーテンの向こうから絶世の美女が現れた・・・

「オスマンじゃ」

「「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・「「「「」

数名の先生は無言で学院長の頭をぶん殴り、引きずってどこかへいった・・・・・・

楽隊による演奏が始まり、ダンスの相手を見つけるために動き出す。

「じゃあ僕も美しい花（女性）を誘ってくるとしよう」

ギーシュは相手を探しにいった。

「さて、僕はどうしようかな？」

アレルは周りを見渡す。

すでに、何組かのペアが踊りはじめている。

周囲を見渡してみる。

しばらく、会場内を歩いてみる。

「ん？」

会場の一ヶ所に生徒達が集中していた。

その中心地には金髪の女性が一人立っていた。

アレルはその女性に見覚えがあった。

「……シヤジャルさん？」

「あら、アレル君」

女性がアレルの声に反応し、近づいてくる。

「……ロングビル（マチルダ）だね」

「あら、よくわかったわね」

「そりゃね……」

「意外だったかい？」

「そうだね、まさかテファのお母さんになるとは、思わなかったよ」

マチルダが変身したのはティファニアの母であるシャジャルさんである。

モード大公はエルフであるシャジャルと恋に落ち、テファが生まれた。

ハルケギニアでは、エルフは恐怖の対象であるから、当然、シャジャルとテファは、屋敷の外に出られない。

二人ともモード大公の屋敷にずっと隠れていた。

訪ねてくる人などいない。

シャジャルは、屋敷でテファと一緒に夫の帰りを待つ。

夫であるモード大公は、責任のある立場の人なのでたまにしか帰ってこない。

そんな妻と娘を思つてモード大公は、家臣であるサウスゴータ伯を呼んだ。

マチルダの父は代々、大公家に使える貴族の一門である。

そして、サウスゴータ伯は娘であるマチルダにシャジャル親子の世話を命じた。

最初マチルダは、エルフの親子を自分が世話をすることに抵抗があった。

なぜなら、ハルケギニアでエルフという存在は恐ろしいものであり、聖地を奪つた相手である事を教えられていた。

しかし、シャジャル親子と会い、接していくうちに、その考えが間違ひであることを知った。

そして、テファのことを本当の妹のように思い世話をしたし、マチルダ自身もシャジャルにとてもよく懐いた。

なぜ、マチルダがシャジャルに懐いたかというと、マチルダの母は彼女が幼い頃に亡くなったからだ。

マチルダは母親の事をあまり覚えていない。

うつすらではあるが自分のことを、抱き上げ、子守唄を聞かせてくれた。

父親が言うには、とても優しい方だったらしい。

しかし、マチルダが物心つく前に、流行病で亡くなった。

ほとんど、母親の愛情を知らずにマチルダは育った。

そんなマチルダに、シャジャルはテファと同じように愛情をもつてせつした。

いつしかマチルダにとって、シャジャルは2人目の母のような存在になった。

血はつながってはいないが、マチルダは本当にシャジャルのことを母と思うようになった。

屋敷から外に出られないシャジャルとテファ。

もし、シャジャルとテファの耳が普通の人のようであつたら・・・

外に出て、いろいろな所に行きたい・・・

マチルダはエルフの耳ではないシャジャルとテファと一緒に出かける夢を何度も見た・・・

真ん中にシャジャル。

マチルダはシャジャルの右手を握り。

テファは、シャジャルの左手を握る。

マチルダの理想の人・・・

それは、“普通の耳”をしているシャジャル。

想像上のシャジャルだった。

「耳がね……」

「………うん」

すこし、しんみりとした。

「……でも、今日の君も美しいよ」

「ありがとう」

ちょうど演奏が終わり、新しい曲が流れ始めた。

「踊っていただけかしら、ミスタ？」

「喜んで」

マチルダの手の甲にキスをして、その手をとった。

アレルはマチルダの腰に手をあてる。

2人は踊りはじめる。

楽隊の演奏に合わせゆっくり、踊る。

互いに、相手の目を見つめあいながら踊る。

それほど長い曲ではないが、二人にとってはその曲がとても長く感じられた。

演奏が終わり、手をつないだまま2人は近くのテーブルの方に歩いて行った。

「ふ」。」「

踊った後に、飲むワインの味は格別だった。

アレルとマチルダの周りには、二人に声をかけたい生徒が集まっていた。

それも、そのはず。

マチルダが化けているシャジャルの姿は、長く美しい金髪とおっとりとした瞳、全身から溢れる優しいオーラ。

何より、その大きな胸……

アレルが化けている父親の姿。

がっしりとした体格、少し癖毛のある金髪を短めに切りそろえている、瞳はどこまでも澄み切った空のような蒼、全身から王者としてのオーラを出す。

周りから見れば、二人とも美男・美女である。

そんな2人に声をかけたいのだが、話しかける勇気はないようなので、少し離れた所から2人を見ている。

「なんか、視線が多いね」

ワイングラスを片手に持ちながらアレルは言う。

「マチルダがあまりに綺麗だからかな？」

「ふふ、アレルもかなりかつこいいですよ」

なんとも近寄りがたい。

アレルとマチルダはしばらく談笑した。

「そろそろ、失礼するよ。僕だけが君を独占するわけにはいかないしね」

「ええ、いつてらっしゃい」

アレルがマチルダと離れると、彼女の周りに男達が集まり、しきりにダンスを申し込んでいた。

アレルも何人かの女性に声をかけられたが、丁寧に断った。

「さて・・・」

「ダ～リン」

後ろから、抱きつかれた。

大胆に胸元あけた真っ赤なドレスを着た美女がアレルの後ろにいた。

「キュルケ姉？」

「そうよ」

アレルが振り返ると、今のキュルケをさらに大人っぽくした美女がいた。

「ツェルプストー辺境伯の奥方かな？」

「よくわかったわね。そうよ、私の母上よ」

「一応パーティーでお会いしたからね。奥方が若い頃の姿だね」

初めてパーティーでツエルプストー辺境伯とその奥方にあつた時は今のキュルケより少し歳をとっていたが、それでもパーティーに来た貴族達をその美貌で虜にしていた。

「ええ、子供を産んでも体形が変わらなかったそうだし、今でも美しい身体を維持しているから、私にとって、母であり、美の師匠でもあるかしら」

「キュルケも将来は奥方以上に綺麗になるよ」

「ふふふ、ありがとう」

「踊っていただけかな？美しいレディ」

「喜んで」

アレルはキュルケから差し出された手に口付けをする。

そして、二人はダンスの輪に加わった。

アレルとキュルケは周囲とは少し違ったダンスをする。

大多数の生徒達は楽隊の奏でる演奏に合わせ、静かにゆっくり踊る。

初め2人は楽隊の曲に合わせ踊る。

他の大多数の生徒と同じように踊るが……

（（にや））

2人は徐々に、踊りのテンポを上げる。

他の生徒の踊りを例えるのであれば、決まった形のダンスで変化のない、つまらないもの。

2人の踊りは、そんな型に通りのダンスではない。

キュルケは自身の属性の『火』のように、荒々しく燃える炎のように激しく、そして情熱的に踊る。

アレルは、キュルケの踊りに合わせつつ、時折、力強い風を炎に送り、彼女に答える。

アレルとキュルケの踊りが終わるころには、他の生徒達は2人の踊りを魅入っていた。

最後にアレルとキュルケは手をつなぎつつ、円を描くようにまわった。

演奏が終わる瞬間

キュルケはくるりとまわり、アレルの胸の中におさまった。

演奏が終わった時、会場の中心で、2人は抱き合うような形で立っていた。

会場に生徒達から溢れんばかりの拍手が2人に贈られる。

アレルとキュルケは手をつなぎながらダンスエリアから出て、マチルダのいる所まで歩いて行った。

そして、舞踏会も終盤に差し掛かり、この行事で新しく何人かの力
ツプルができた。

スレイプニールの舞踏会（後書き）

早く新話を書きたい・・・

交渉（前書き）

最新話です。遅くなって申し訳ありません。

誤字・脱字がありましたら指摘をお願いします。

廊下を誰かが疾走する音が聞こえてきた。

「失礼します！！」

勢いよく、ドアが開けられ学院長の秘書であるロングビルことマチルダが入ってきた。

「ミ、ミス・ロングビル！？いったいどうしたのですか？」

コルベールが尋ねる。

「コルベール先生！！ミスタ・ランカスターとミス・ヴァリエールはいますか？」

「ええと、あそこにいますが」

アレルとルイズがいる席の方を指さす。

「ミスタ・ランカスターとミス・ヴァリエールにお客様がいらっしやっているので授業を抜けてもらってもよろしいでしょうか？勿論、オスマン学院長の許可は頂いています」

「それなら、問題ありませんが」

「では！！」

そう言つて、マチルダは眠っているアレルとルイズをレベテーションで持ち上げて連れていた。

「ちよつと！ミス・ロングビル！私は起きてますよう！」

「zzzzzzzz」

場所：学院長室

マチルダがアレルとルイズを学院長室に連れていくと、室内には学院長の他に、4人の男女がいた。

学院長「……………」

ルイズ「……………」

「……………」

「あらあら」

学院長室は気まずい空気が満ちていた。

「「「・・・・・・・・・・」」」

「まあまあ」

「・・・・・・・・ZZ」

「「眠るな!!」」

ルイズと金髪ツリ目メガネがアレルに突っ込む。

「冗談ですよ」

この部屋には、オスマン学院長、ヴァリエール公爵、公爵夫人、エレオノール、カトレア、ルイズ、アレルの7人がいる。

「で、どのような用件でしょうか？」

笑みを絶やさず、公爵に尋ねるアレル。

「・・・娘のルイズから手紙がきてね。学院にいる留学生が使った復魔法は少し変わっていると聞いてね」

「なるほど・・・」

笑みを絶やさず、アレルはヴァリエール公爵の話聞く。

「それでね、私の娘の治療を引き受けてくれないかね？」

「うん・・・無理ですね」

「どうしてよ!!」

アレルの返答にルイズがかみつく。

「ミス・ヴァリエール。僕がゲルマニアの人間ということは知っているよね？私が他国の貴族、それもトリステインの公爵家の娘である、君のお姉さんを勝手に治療してはまずいんだよ。最悪、公爵家と裏で取引をしていると他のトリステインの貴族達から批判される可能性が大きい・・・それを承知で私に治療をさせるのかい？」

「うつ・・・」

「・・・それは、無論分かっている・・・だが、カトレアの病が治る可能性があるのなんとか治療してもらえないだろうか？」

公爵はアレルに言う。

「・・・治療することは問題ありませんが、それをするには、2つ条件をのんでもらう」

「何言ってるのよ！あんた由緒正しきヴァリエール家に――」

ルイズがアレルにかみつくが、彼は無視して話した。

「うちの陛下に治療の許可を貰ってくることに」

「ゲルマニア皇帝！？」

「それと、ツエルプストー家とヴァリエール家の和解」

「「なっ、なんですって！」」

エレオノールとルイズが叫ぶ。

「エレオノール、ルイズ・・・少し黙りなさい」

公爵夫人が騒ぐ2人に言う。

「で、でも母様！」

「そうよ、母様、こんな——」

「2人とも・・・」

「「ひっ」」

公爵夫人から殺気に似た圧力を2人は受け、悲鳴を上げる。

「ミスタ・ランカスター・・・確かに貴方はゲルマニアの貴族です。貴方から見れば、私達は他国の貴族・・・その私達の願いを聞き入れることは難しいのは分かります・・・ゲルマニア皇帝の許可にについてはこちらでも納得できます・・・しかし、何故ツエルプストー家と和解しなくてはならないのですか？」

公爵夫人がアレルに理由を聞く。

「それはですね・・・もうヴァリエール家とツエルプストー家の長きにわたる憎しみの連鎖を断ち切りたいからですよ」

「どうしてよ！ヴァリエールの先祖はツエルプストーの人間に婚約

者を奪われたり、戦で殺されたりしたのに・・・なんで、私達がそんなツエルプストーと和解なんてしなくちゃいけないのよ!」

ルイズはアレルの話に怒る。

「・・・今までトリスティンとゲルマニアが何度戦ったと思う?」

「それがこの話とどう関係するのよ!」

「小競合いも含めればかなりの回数だ・・・戦の始まり・・・君達の祖先の恋人が奪われたというくだらない理由でね」

「どこがくだらない理由なのよ!野蛮人に家のご先祖様は――」

「止めなさい!ルイズ!」

公爵夫人がルイズを止める。

「何百という民の命が失われたのか?恋人が奪われた・・・確かに悔しいだろう・・・自分が好いていた人がいなくなってしまうのは・・・だからといって、何も関係のない人の命を奪っていいのか?君の祖先が始めた憎しみの連鎖・・・その始まりは、恋人が奪われた・

・そんなくだらない理由で亡くなった者達・・・その者達にも大切な人がいただろう・・・ミス・ヴァリエール、何故、平民が貴族に奉仕するのだと思う？」

「そんなの決まっているわ！平民は貴族に奉仕するものだからよ。私達には始祖が与えてくれた力、魔法がある！！」

ルイズは胸をはってアレルに言った。

「・・・だから、我々貴族は偉いのか？そして、平民を蔑んでいいのか？」

「そうよ！当然じゃない」

「・・・だったら、君は貴族ではない・・・愚か者だ」

「なっ！なんですって！！取り消しなさい！」

ルイズはアレルに杖を向ける。

「ルイズ！」

公爵がルイズの腕を押さえる。

「お父様！こいつは私を侮辱しました！」

「ルイズ！これ以上私達に恥をかかせないで！！」

「お、お母様まで・・・こいつは！」

「杖をおろしなさい」

しぶしぶルイズはアレルに向けていた杖をおろす。

「ミス・ヴァリエール・・・貴族に様々な特権が与えられているのは何故だと思う？・・・それは始祖が我らに与えた魔法という力・・・この力があるから我々は貴族なのか？なら魔法の使えない平民はどうなる？そんな平民は貴族からしたら弱い者であるのは確かだ。しかし、この力は弱き者を虐げるために与えられた力か？否！弱き者を救うために与えられた力だ！それを己の欲望のために使うなどと・・・そんな者は貴族ではない」

「それが、ツエルプストーとどう関係があるのよ！？」

「戦で最も勇敢な者は誰だと思っ？」

「そんなの決まっているは、私達貴族よ！！」

「・・・違うな、最も勇敢な者は平民の兵士だ」

「どうしてよ！！」

「ミス・ヴァリエールは貴族が勇敢に敵に挑む存在だと思っている
ようだがそれは極一部の貴族だ・・・大多数の貴族は戦わずに兵士
の後ろで、『突撃せよ』という指示を出すくらいだ・・・勝てない
とわかっている戦いで、貴族が『進め』と指示を出したら、その指
示に従わねば味方のはずの貴族に殺さる・・・退却も許されず、敵
に囲まれ命を落としていく・・・そうして、兵士達が命がけで自分
の大切な者のためその命を散らす・・・その間に貴族は逃げ出す・
・味方を見捨てて」

「嘘よ！そんなの嘘に決まっている」

「そんな戦場を私は何度も見た・・・大軍の前に兵士に突撃を命じ、
自分はさっさと逃げだす貴族達を・・・」

「「「「「.....」」」」」

「貴族は生き残り、兵士は死ぬ。生き残った貴族は自分の領に戻り何をすると思う？戦争で勝てば敵の財貨を手に入れられるが、負けたのであれば何も手に入らず、膨大な戦費（借金）だけが残る・・・当然、死んでいった兵士には家族がいる。残された家族は夫や息子などの働き手を失っているのに、貴族は税を軽くするどころか今まで以上に税を重くする・・・残された家族は必死に税を払おうと働くが、男手を戦争で失っている状態で払える訳がない・・・戦争はいつでも、貴族が生き残り、平民の兵が死ぬ・・・」

学院長室は重い空気が流れる。

「・・・ヴァリエール家とツエルプストー家の憎しみの連鎖・・・それによつて今まで多くの兵士が死に、残された家族は絶望の中を生きる・・・そんな世界は悲しくないか？私はそんな世界は嫌だね」

「「「「「.....」」」」」

「ヴァリエールとツエルプストーが和解すれば、民の血が流れることはない・・・それが私の出す条件です。これを満たせばカトレア嬢の治療を引き受けましょう・・・」

誰一人、しゃべらず、時間だけが過ぎてゆく・・・

「・・・いいだろう」

「「お、お父様!？」」

「貴方!？」

「ただし・・・カトレアの病が治らなかった場合は、貴様はどう責任をとるつもりだ・・・」

「私のこの首を刎ねてもらって結構です」

「「「「なっ!？」」」」

ヴァリエール一家はアレルの言葉に驚愕する。

「ミスタ・ランカスター!？」

アレルの話を黙って聞いていたオスマン学院長は彼の言葉に思わず声をあげてしまう。

アレルの表情は真剣だった。

それが嘘であるとは思えない。

「二つの条件を満たしたら、お呼びください」

そう言って、アレルは学院長室から出て行った。

「「「「「.....「「「「「

ヴァリエール一家とオスマン学院長は、しばらく固まってしまった。

「.....彼はいたい.....」

公爵の弦音が大きく聞こえた。

数日後。

トリステイン王国中を衝撃が走った。

トリステインの名門貴族のヴァリエール公爵家とゲルマニアのツェルプストー家との和解が、ゲルマニア皇帝とトリステイン王妃の立ち会いの下、正式に決まった。

交渉（後書き）

「ハーフェルフの皇太子」の主人公とヴァリエール一家との出会いを少し変えてみました。

すこし、無理があつたかな？

内容がぐたぐた、もしくは、矛盾していたら指摘をお願いします。

治癒（前書き）

間違って「ハーフェルフの皇太子」に投稿していました。

すいません。

治癒

ヴァリエール家とツエルプストー家の和解が成立した翌日。

再びアレルは学院長室に呼び出された。

部屋に入ると、オスマン学院長、ヴァリエール公爵、カトレア、アレルの4人がいた。

「和解成立おめでとうございます」

アレルは笑みを絶やさず、公爵に言う。

「……これがゲルマニア皇帝の許可状だ」

「拝見します」

『

許可状には、ヴァリエール公爵の次女の治療を許可することを正式に認めるということが書かれていて許可状の最後に、

『アレル・ラ・フォン・ランカスターは全力で、ヴァリエール公爵の次女の治療をせよ』

と書かれていた。

デイクト・マジックをかけて確かめる。

「確かに、本物のようですね」

「・・・それと、皇帝から君に手紙を預かった」

「？（なんだろう？）」

許可状とは別に封印のされた手紙をアレルは受け取った。

ゲルマニア皇室を表す印が押された手紙を開封して中を確認する。

「・・・（父上・母上）」

アレルは思わずため息をつく。

『ヴアリエール公爵の娘の治療は勿論やって問題ない。それより、いつになったら嫁を連れてくるんだ？ パパは、お前の孫を早く見たいぞ！』 by 父

『私も早く、アーちゃんの子供が見たいわ』それに、アーちゃんのお嫁さんと一緒にいろいろお話もしたいわ』孫はいっぱいほしいわ

♪ b y 母

『とにかく！！お嫁さんを連れて来い（来なさい）！！』

「はっははは」

アレルは引き攣った笑顔を浮かべる。

「？」

そんなアレルの様子を見て、公爵は手紙の中身が気になったが、皇帝の書いた手紙を見るわけにはいかなかったので、我慢した。

「治療の報酬として用意できるものは、ランカスター殿が望むものを出来る限り用意しよう」

ゲルマニアで1、2位を争うといっていいほど発展しているランカスター領。

その統治者であるアレルは勿論とんでもなく大金持ちである。

それこそ、トリステイン王国が民から集める税金以上の収入を一人で得ている。

そんなアレルに金銭的な報酬はあまり意味がない。

「分かりました。では、カトレア嬢を診察しましょう」

「よろしくね」

のほほんとしているカトレア。

場所を学院の保健室に変える。

ベットの上にカトレアは身体を横たえている。

アレルは最初に基本魔法である「ディクト・マジック」をカトレアにかける。

これは、水メイジが治療の対象の病気がなんなのかを見るときによく使ったりする魔法である。

この魔法で、対象の体内の水の流れを透視し、その流れがおかしいところを治癒するのが基本的な治癒の方法である。

「……うん、体内の水の流れには異常は見られないな」

「あら？そつなですか？」

さらに解析の精度を上げてみても、結果は変わらない。

「……（ディクト・マジックでは分からないのか？）」

アレルの目には、カトレアの体の隅々の水の流れが見える。

「健康な人の水の流れと大差はないのですがね……」

「……（秘薬の使い過ぎでもないのか？）」

予想していたものと違っていたのでアレルは首をかしげる。

ディクト・マジックでは原因がわからないためアレルは方法を変えた。

「カトレア嬢、少しお願いがあるのですがよろしいですか？」

「どのようなことですか？」

「これから私が行使する魔法は少々変っているので驚かないでくださいね」

「分かりましたわ」

「でわ………」

アレルの周りに、公爵領で平民を治療した時と同じ、光が集まりはじめた。

「……綺麗」

カトレアは光の中心にいるアレルをみて、その美しさのため息をついた。

「みんな、頼むよ」

アレルのお願いを聞いて、光がカトレアの身体を包んだ。

（なんだ！？この魔力の塊は？）

アレルは精霊達の力を通して、カトレアの身体を見てみると驚いた。

彼女の身体の心臓付近にある異常な魔力の塊を見つけた。

その魔力の塊は、カトレアの心臓を圧迫するように存在していた。

さらにカトレアが魔法を行使する際に精神力を通す回路を圧迫していた。

それらの影響が身体全体に広がっていた。

（ただの魔力の塊であれば、先ほど使った『ディクト・マジック』で見つけることが可能なはず……しかし、それでは見えなかった……）

アレルは精霊の力を借りて、初めて見る事ができたこの塊につい

て考えていた。

似たようなケースをアレルは見たことがある。

そのケースでは、その人の系統の塊が身体のどこかでできて、体内の水の流れや精神力などの流れを阻害していた。

事前にカトレア嬢の系統は土であると聞いていたが、この魔力の塊は土系統ではない。

そして残りの火・水・風の系統でもない……

では、この塊はいったい何の系統なのかをアレルが考えていると

『これ、昔みたことあるの〜』

『あるの〜』

『昔、大いなる意思に挑んできたの〜』

『嫌い〜』

病の分析のためにカトレアについていた精霊達が口々にアレルに訴

える。

（なるほど）

「・・・・・・解析終了」

カトレアを包んでいた光が消えた。

「あら、もう終わりなの？」

カトレアは少し残念そうに言った。

「ええ、終わりました」

「それで、私の病は治るのかしら？」

いつにもなく真剣な顔でカトレアはアレルを見る。

「結論から言えば治ります」

「っ！！ほ、ほんとう？」

何人もの高名な水メイジに見てもらっても、治らなかった病が治るということにカトレアは驚いた。

半ばあきらめていたからだ。

自分はもう治らないと思っていたから。

「治ります。カトレア嬢の心臓付近にある魔力の塊を取り除けば」

「魔力の塊？」

「ええ、カトレア嬢の心臓付近に魔力の塊ができています。それ自体は珍しいことではないのですが……」

「どこがおかしいのですか？」

「体内にできる魔力の塊はその人の系統の塊なのですが……カトレア嬢の塊は火・水・風・土の系統でないのです」

「？」

「火の系統の塊であれば体温の上昇、水の系統の塊であれば体温の低下、風の系統の塊であれば血流の異常、土の塊であれば血液の凝固、カトレア嬢に当てはまる症状は？」

「え」と、どれも当てはまらないですわ」

カトレアは首を傾げる。

「しかし、カトレア嬢の体内にある塊は四系統の塊ではない」

「じゃあ、なんなのですか？私の体内にあるものは・・・」

カトレアは自分の胸の付近を握りながらアレルに尋ねる。

「・・・おそらく『失われた系統』でしょう」

それが意味するのは・・・

「・・・『虚無』」

「ええ、カトレア嬢の体内にあるのは『虚無』の魔力の塊です・・・
・おそらく貴女には虚無の系統の素質があつた・・・しかし、
それを使えるような身体の構造ではなかった・・・使われずに体
内で行き場を失つた『虚無』は蓄積していつて、様々な症状を引き
起こした」

「・・・」

カトレアも言葉を失つた。

始祖ブリミルが使つたとされる系統『虚無』

すでに伝説とされている系統。

その『虚無』が自身の身体を蝕んでいた。

「・・・どうして？」

「『虚無』の系統を行使できたのは始祖であつた・・・その始祖
の血脈である王家はその系統に目覚める可能性が高い（現にテファ

はそうだし）．．．．ヴァリエール家は王の庶子の血脈であるから可能性は高いですね」

「でも、私には『虚無』の素質はあっても、使う、素質はないのでしょ？」

「ええ、そうです」

「じゃあ、とりだしてくれますか？」

「分かりました、目を閉じ深呼吸をして、気を楽しんでもってください」

「はい」

カトレアは目を閉じゆっくり深呼吸をした。

少しだけであるが、カトレアは震えていた。

「．．．．．」

「．．．．．うん？」

アレルはカトレアの頭を優しく撫でた。

「大丈夫、必ず助けるから」

「は、はい／＼／＼／＼／」

アレルは再び精霊達を呼び、彼等の力を借りた。

ゆっくり、カトレアを中心に精霊達が回る。

部屋が光で満ちる。

アレルは精霊達を介して、カトレアの体内に自身の魔力を注ぐ。

しばらくするとカトレアの胸の付近から、膨大な魔力が溢れ出てきた。

溢れ出た魔力は次第に集まり、大きな光の塊になった。

『虚無』の塊ができた。

「・・・・術式固定」

アレルの魔力は精霊達を介してカトレアの体内に巣食っていた『虚無』の塊を覆う。

しばらくして、アレルは魔力の流れを止めた。

カトレアの胸の上で浮遊していた塊は消えて別のものになった。

それは桃色の美しい宝石だった。

アレルはそれを手に取り、ディクト・マジックをかける。

その宝石には、おびただしい量の魔力が込められていた。

アレルはそれに封印魔法をかけた。

「・・・・うつ」

カトレアが目を覚まし、ベットから体を起こす。

「気分は？」

「とても良いわ・・・さっきまでと全然違う」

「これで、貴女の病の原因は無くなりました」

「立ちあがっても大丈夫かしら？」

「ええ」

アレルはカトレアに手を差し出す。

カトレアはアレルの手を取り、ベットから起き上がる。

「すごい！身体がすっごく軽いわ！」

はしゃぎまわるカトレア。

「きゃっ
」

カトレアは勢い余ってバランスを崩す。

「おっと
」

カトレアをアレルは抱きとめる。

「／／／／／／／／／／
」

アレルの腕の中で真っ赤になるカトレア。

「まだ、病み上がりなんだから気をつけて。それに、病が治っても
体力はまだ回復していないんだから」

「はっ、はい／／／／／／／／／／
」

「んっ？どうしたんだい？」

俯くカトレアにアレルは尋ねる。

「……もう少し……このままでいいですか？」

上目づかいでアレルを見上げるカトレア。

「いいよ」

しばらく、アレルはカトレアを抱きしめていた。

それをカトレアの様子を見に来た公爵が見てしまい、公爵がアレルに襲いかかった。

しかし、突如現れたゴーレムの腕が公爵を握りしめた。

そこには、満面の笑みを浮かべているカトレアが杖を父である公爵に突きつけていた。

「お父様？何をされようとしたのですか？」

「い、いや、カトレア？」

普段の優しいカトレアからは想像できないプレッシャーが出ていたので、公爵は上手く返せなかった。

「お父様、この方は私の病を治してくださったのですよ。その方に杖を向けるなんて……」

公爵は真っ青になった。

公爵は目の前にいるカトレアが、かつて『烈風』と呼ばれた妻と同じ力を持つように思えた。

「……お父様……私の病を治してくれた方に私を嫁がせるというお話でしたよね？」

アレルはカトレアと公爵の話を横で聞いていたが、カトレアの発言に驚いた。

「力、カトレア？」

公爵は自分の娘が何を言っているか分からなくなってきた。

「・・・そうになると、私はミスタ・ランカスターのもとに嫁ぐということでよろしいですね？」

「へっ？」

アレルはカトレアの発言に驚き。

「な、な、なな」

公爵は顔を赤色や青色に変えた。

「あらっ？私のこと嫌いなの？」

アレルに上目づかいで尋ねてくるカトレア。

「え」と

頬をぼりぼり搔きながらカトレアに向く。

公爵からは殺気が向けられる。

それに気付いたカトレアは父親をゴーレムの手でさらに強く握りしめた。

「……僕は心に決めた人がいるんだ……だから——んっ
!」

アレルは言葉を続けようとするが、カトレアの指が彼の唇を塞いだ。

「……それでも……お慕いしては駄目ですか？」

カトレアはアレルに抱きつきながら話す。

「「「……」」」

「私、諦めません。絶対あなたに振り向いてもらいますからね」

「ほほほ、ええの若いものは……」

「アレル……」

遠見の鏡で保健室の様子を覗いていたオスマンとマチルダ。

「ミス・ロングビルどうじゃい？わしと・・・」

「ふざけんじゃないよ!!」

セクハラをしてきたオスマンをマチルダはゴーレムで潰した。

数日後、アレルはランカスター領から送られてきた書類に目を通していた。

「ん？」

政務とは関係のない報告書が混ざっていた。

内容を確認したアレルは愕然とした。

『ヴァリエール公爵の次女のカトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・フォンテーヌ様がランカスター領に滞在中。』

現在、ランカスター領の幻獣飼育場で幻獣達の飼育の手伝いをされています」

「・・・・・・・・・・」

アレルはカトレアの行動力に驚いた。

場所：ランカスター領の幻獣飼育エリア

「・・・・・・・・・・」

幻獣達の世話をしている者達は目の前の光景に啞然としていた。

「きゃーーーーー」
♪ 行っけーーーーー ♪

大型のマンティコアに跨ったカトレアが草原を疾走していた。

そのマンティコアはマンティコアの群れの中でリーダー的存在で、

かなり気難しい性格で自分の認めた者にしか、騎乗を許さなかった・

そんなマンティコアは何故かカトレアの言うことを聞き、今、他の幻獣達に従え草原を疾走している。

「「「・・・」」」

その日から、大型の幻獣に跨る桃色の髪美しい女性が草原で見られるという噂がランカスター領で流れたそうだ。

治癒（後書き）

感想・誤字・脱字の指摘などをお願いします。

微熱VS雪風（前書き）

遅くなりました。
最新話です。

微熱VS雪風

「……本当にやるのかい？」

アレルは目の前で対峙している2人の少女に尋ねる。

「ええ」

紅の美女。

「……問題ない」

青髪の少女。

「……決闘のルールに従い、アレル・ラ・フォン・ランカスターがこの決闘の立会人となることを誓う。魔法・武器の使用は自由。使い魔の使用はなし。私が危険と判断した時点で決闘は終了とし、勝敗を決める。2人ともそれでいいかな？」

「………」

2人は無言で頷く。

「………はじめ!!」

2人は杖を相手に向ける。

火魔法『ファイアー・ボール』

水と風を足した氷魔法『アイシクル・ランス』

二つの魔法がぶつかり合う。

「……………（どうしてこんなことになったんだろう？）」

アレルは目の前の戦いを見ながら思う。

2人の決闘の前日。

「みなさん、今日の夜は舞踏会があります。本日の授業は午前中までです。午後は舞踏会に向けてそれぞれの準備をしてください」

シュヴルーズ先生はそう言って、授業を終わらせた。

今日の舞踏会は前回ののように仮装をして踊る舞踏会とは違う。

学院にある程度なれた一年生達が主役の舞踏会である。

女子は煌びやかなドレス・宝石を身につけ化粧をして舞踏会に参加する。

男子はシンプルに黒を基調としたタキシードを着る。

女子は意中の男子からダンスに誘われるように着飾る。

男子も意中の女子を口説き落とそうと、躍起になる。

しかし、この舞踏会はただの舞踏会ではない。

前回のスレイプニールの舞踏会は、入学したての一年生に舞踏会の雰囲気慣れてもらうために仮装をして参加するが、今回は仮装をしない。

生徒はそれぞれの家の名を背負ってこの舞踏会に参加する。

貴族にも様々な者がいるが大きく分けて4つある。

爵位は高いが、金銭面で苦しい家。

爵位は低いが、金銭面では余裕のある家。

爵位も低く、金銭面でも苦しい家。

爵位も高く、金銭面も余裕のある家。

何故、学院の舞踏会で生徒は家の名を背負うのか。

生徒達は舞踏会で着るためのドレス・装飾品を用意しなくてはならない。

実家の財政が豊かであれば、舞踏会でそれなりの物（ドレス・装飾品）が用意できる。

逆に、財政が厳しい家は良い物を用意するのは難しい。

もし、爵位が高い家の者が、舞踏会でみすばらしい恰好をしていたら、今後、社交場において笑いものにされてしまう。

爵位の低い家の者が舞踏会で前者のような者達より良い物を着てい

れば、妬みの対象にされてしまう・・・

この舞踏会では、生徒達の恰好から、実家の財政状況がどのようになっているのかがある程度分かってしまう。

いくら家柄が良くても、金のない家の女性に男は声をかけない。

だから女子生徒達は、舞踏会が始まる前に自分の着る高価なドレスや装飾品を買う。

この時期、娘が学院に入学した貴族の家では、娘のドレス代・装飾品代をだすためにどうしようか悩み頭を抱える当主が多いそうだ。

舞踏会が始まる直前。

男子は、会場で舞踏会が始まるのを待つ。

女子生徒は会場の外で待機している。

舞踏会が始まってから会場に入っていく。

既に、パートナーがいる生徒はその人のもとに行く。

パートナーのいない生徒達（主に男子）は、相手（女子生徒）に声をかける。

舞踏会の決まりでは、男性が女性に声をかけるのが基本で、女性が男性に声をかけることはあまりない。

男性から声をかけるのが当たり前なのだ。

「ああ、なんて君は美しいだろう。是非僕と一曲踊ってくらないかい？」

ギーシュは会場に着くと、綺麗に着飾った女子生徒に声をかけていた。

「えっ？！友達を探している？奇遇だな、僕も友人を探しているところなんだ」

ギーシュは会場に来ている筈のアレルを探していた。

既に舞踏会は始まっている。

数組のペアは会場の真ん中のダンスエリアで楽隊の奏でる演奏に合わせ踊っている。

「おっ！」

ギーシュは会場の隅で壁に寄りかかっている女性を見つけた。

「ミス・ロングビル、一曲踊っていただけませんか？」

「いや、是非、私と！」

「いや、僕が！」

数名の教師と生徒が薄紫色のドレスを着た学院長秘書のロングビルに声をかけていた。

「ありがとうございます。でも、待ち合わせをしている人がいるので」

ロングビルは微笑みながらダンスの誘いを断る。

「ミ、ミス・ロ、ロングビル！」

「あら、ミスタ・コルベール」

ツルッパゲールこと、コルベールがロングビルに声をかけた。

「よ、よろしければ、ぼ、僕と一曲——」

「——悪い。ロングビル、待たせたかな？」

騒然とした会場に、ふっと透き通る声が響いた。

ロングビルをダンスに誘おうとしていた者や周りにいた者達は振り返った。

「どうもネクタイが上手く結べなくてね……」

ネクタイを綺麗に絞めようとしている一人の、美男がゆっくりとロングビルの元に歩いてきた。

黒のタキシードに身を包む男は、所々にシルバーのアクセサリーを身につけている。

さらに、普段はポニーテールにしている銀髪をおろしている。

彼が歩くたびに、その銀髪が風に揺らぐ。

そして会場の真ん中をコツコツと革靴の音を響かせ、ロングビルの前までやってきた。

「どうしたんだい？」

一同は呆気にとられていた。

楽隊の演奏も止まる。

踊っていた女子生徒はその動きを止め、女子は彼に熱い視線を送る。

男子生徒は、彼に嫉妬の視線を送る。

「やっと、来たのね」

ロングビルは目の前に来た彼に対して言った。

彼はゆっくりお辞儀をして彼女に手をさしだして

「一曲踊っていただけませんか？」

「喜んで——ミスタ・ランカスター」

ロングビルは彼の手をとった。

アレルはロングビル（マチルダ）の手をとり、ダンスの輪に入った。

止んでいた演奏が再び奏でられ、アレルとマチルダを中心に周りの者達も動き出した。

アレルはダンスをしながら、

「しかし、マチ姉も大変だね」

苦笑しながらアチルダに話しかける。

「あら、貴方が遅いからいろいろな方に囲まれてしまったのよ」

妖美な笑みを浮かべながら、アレルに返すマチルダ。

「ごめんよ。なかなか、ネクタイが綺麗に結べなくてね」

「そう言えば、アレルが小さな時もそうだったわね」

昔、アレルがまだ幼い時、マチルダは彼のネクタイを何度か直したことを思い出した。

「うっ、苦手なんだよね・・・」

「もう、世話のかかる弟ね」

そう言って、アレルのネクタイを解き、結びなおすマチルダ。

アレルの身長はマチルダより高いため、マチルダが彼を見上げるような形でネクタイを結んでいる。

「——はい！綺麗に結んだわよ」

「ありがとう」

「「「「・・・」」」」

マチルダがアレルのネクタイを結び直している場所は・・・会場
ど真ん中。

傍から見れば、マチルダがアレルにキスをしそうな距離であった。

2人の出す桃色？空気で演奏が止まった。

「あっ・・・」

マチルダがようやく、それに気付き顔を真っ赤にして俯いた。

普段は凜とした雰囲気の学院秘書ロングビルを演じているマチルダ
のギャップに周りの男性教師と男子学生達は

「「「うおー!」「」」

雄叫び上げ、マチルダにダンスを申し込んだ。

アレルも複数の女子生徒に囲まれている。

アレルは笑みを絶やさず、一人ひとり、女子生徒の相手をする。

「あら、モテモテね」

そこに、上級生と思われる男子生徒を引き連れた、キュルケが話しかけてきた。

「そうかい？」

アレルは手を上げて、キュルケに答える。

大胆に胸元を開いた黒のドレスを着たキュルケは会場の男子生徒達の注目の的だ。

彼女の後ろには、次にダンスを申し込もうとしている男子生徒の群

がいた。

「キュルケの方がすごいじゃないか」

「ふふ、当然よ」

「僕は少し休憩するから」

「ええ、後で一曲踊っていただけませんか？」

「勿論」

アレルはキュルケと別れた。

「ふ」

ワインを軽く飲んで、アレルは一息いれた。

しばらくアレルは周りの生徒達のダンスを見ていたが、

「きゃあ——」

「うおー!」「」

急に会場内が騒がしくなった。

「ん?」

アレルが見てみると、キュルケが全裸で立っていた。

彼女の足元にはドレスの切れ端が落ちていた。

男子生徒や男の教師は彼女の身体を凝視し、女子生徒は自分の彼氏の目を塞いだ。

キュルケをエスコートしていた上級生は鼻血を出して倒れていた。

「.....」

アレルは無言で、杖として契約していたシルバーの指輪を使ってキュルケの周りに水の壁（外からは中の様子が分からない壁）を作り、

彼女の裸体を周囲から隠した。

周りの生徒達は急に現れた水の壁に驚いた。

アレルは近くにあったテーブルクロスをつかみ、キュルケの所に持った。
つていった。

「はい、これで隠してキュル姉」

「あら、ありがとう」

キュルケはアレルから受け取った、テーブルクロスを纏った。

「大丈夫？」

「ええ、問題ないわ」

表面では平静を装っているが、キュルケはかなり怒っている。

「風の刃か」

アレルは地面に落ちているドレスの切れ端を見て言った。

「風のメイジの仕業？」

「・・・たぶん、ライン以上の風メイジの放った魔法だね。対象の服だけを切る魔法はドットだったら出来ないからね」

アレルはキュルケがテーブルクロスをしっかりと纏ったのを確認し、自分の上着を彼女に渡した。

「それも羽織つていいよ」

「ありがとう」

アレルは魔法を解除した。

キュルケの姿を見た男達からはアレルにブーイングが送られた。

そして、キュルケの傍に一人の男子生徒が来て、彼女に何かを伝えていた。

その男子生徒がいなくなった後、キュルケに聞いてみた。

「今のわ？」

「ええ、私にこんなことをした犯人を見たそうよ」

キュルケの目には怒りの炎が宿っていた。

「ちょっと用事が出来たからアレル、私は部屋に戻るわね」

キュルケは会場を後にした。

「やあ、アレル。大変だったね」

「ギーシュか」

アレルの傍にギーシュが寄ってきた。

「しかし、ミス・ツエルプストーのあの姿はなかなか眼福だったよ、特にあの胸！」

一人盛り上がっているギーシュ。

「・・・・・・・・後ろ」

アレルがギーシュの後ろを指さしながら言う。

「へ？」

「ギイイイシユユユユ」

額に怒りのマークを付けた、モンモランシーがいた。

「モ、モンモランシー」

「ご愁傷様」

アレルは合掌した。

ギーシュはモンモランシーに首根っこを掴まれ、引き摺られていった。

「さて、僕も引き上げるか」

舞踏会は先ほどの騒動のせいで、大混乱。

アレルは自分の部屋に帰った。

翌日の夜。

「アレル、ちょっといいかしら？」

キュルケがアレルの部屋に訪れた。

「どうしたのキュル姉？」

「お願いがあるの」

「どんな？」

「決闘の立会人をお願いできるかしら？」

「へ？」

そして、月明かりの下で、キュルケとタバサが対峙している。

しかし、最初に放った一撃以外は、2人とも魔法を放たなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言で睨みあう2人。

「・・・・・・・・（1、2、3、4人か）」

この2人の決闘を見ている者がアレル以外に4人いた。

??? side

「くくく、計画通りだな」

不敵な笑いをするトリステイン魔法学院の制服を着た男が、決闘の様子を見ていた。

「ちょ、ちよつとヴィリエ！」

「うん？」

「あの方がいらっしゃるなんて聞いてないわよ！」

「あの方？」

キルケとタバサの決闘の様子を見ていた女子生徒の一人がヴィリエを非難する。

「『水帝』様よ！」

「・・・ふん、別に大丈夫だろ」

「でも、もしあの方に、私達のしたことがばれたら・・・」

（（こくこく））

他の女子も同意する。

「今からでも止めた方がいいんじゃない？」

「もう、決闘は始まっている。止めるのは無理だ。あの2人のどちらかが負けるまではな」

「ちょっと！こんな大事になるなんて聞いてないわよ！」

「わ、わたしは、やめるは！」

「今更抜けるのは無理だぞ。君達は恋人をキュルケに奪われた復讐をしたいからこの計画に参加したんだらう？」

「「「・・・」」」

女子生徒達は黙る。

「君達はタバサの部屋にある本を燃やして、それをキュルケの仕業に見せかけることをした。代わりに僕は舞踏会でキュルケのドレスを魔法で切り刻んだじゃないか」

「なるほど、あれはお前達の仕業か……」

ヴィリエ達の背後から声がした。

「「「「?!」「」」」」

ヴィリエ達は後ろを振り返った。

そこには決闘の立会人をしている筈のアレルが立っていた。

「『ミラージュ（蜃気楼）』か」

アレルがギター戦で使ったオリジナル魔法。

アレルは無言でヴィリエ達を魔法で拘束した。

「・・・しばらく、その格好で2人の戦いをしている」

「くくそ」

ヴィリエは悪態をついた。

逃げ出そうと動き回るが、頬に冷たい感触を感じた。

それはアレルの持つ剣だった。

「うつ・・・」

「おとなしくしている」

ヴィリエもようやくおとなしくなった。

女子生徒は、アレルの魔法で拘束された時点で抵抗しなかった。

ヴィリエ達はキュルケとタバサの戦いをおとなしく見ているしかない

かった。

「(ちくしょう)」

???side end) ヴィリHside (

「何だか騒がしいわね」

(いくり)

「まあ、私達には関係ないわね」

(いくり)

「「.....」」

暫し、互いに睨みあう。

「ねえ」

キュルケがタバサに話しかける。

「・・・なに？」

タバサは聞き返す。

「私は、あなたが舞踏会で杖を持って来ていて、私に魔法を放った犯人だと聞いたのだけど」

ボロボロになったドレスの一部をタバサに見せる。

キュルケがタバサと決闘をする理由は舞踏会での辱め。

「私が部屋に戻ったら部屋の本が火の魔法で焼かれていた・・・ベツトの上にあなたの髪が落ちていた・・・」

タバサは半分燃やされた本をキュルケに見せた。

タバサが決闘する理由。

大好きな本を燃やされたことに対する怒り。

「……………」

「あなたじゃないわね」

キュルケがタバサに言う。

「……………同感」

タバサもキュルケに言う。

「ええ、あなたの風は私のドレスを切り刻んだ風と全然違うわね。
それに私の火だったら、本なんて跡形もなく燃やしつくすわ」

「……………私の魔法はもっと鋭い」

「……………勘違いのようね」

(くぐく)

「両者、これ以上の戦闘継続の意思はないな？」

アレルが2人に問う。

「ええ」

(こくり)

「じゃあ、真犯人に来てもらおうか」

『ミラージュ』のアレルが、ヴィリエ達を引きずってきた。

「「「「「.....」」」」」

ヴィリエ達はキュルケとタバサの前に突き出された。

「こ、これは、ヴィリエが言いだしたことなの」

一人の女子生徒がキュルケとタバサに言う。

「そ、そうなの！」

「私達は、ヴィリエに無理矢理手伝わされて——」

「なっ？！何を言っているんだ！誘ってきたのはお前たちだろう！
！」

互いに罪のなすりつけ合いをする。

「無様ね・・・」

「同感・・・」

「ねえ、アレル」

「ん？」

「お仕置きしていいのよね？」

「勿論、いいよ。2人は被害者だしね」

「ごめんなさいね、ええと、タバサだったわね。こいつらのお仕置きは私がするから」

キュルケは杖を構え、ヴィリエ達の所に行こうとするがタバサにマントを引っ張られた。

「どうしたの？」

「・・・手伝う」

タバサも杖を構えた。

「そうね、一緒にやりましょう」

(こくり)

「ひっ!」「ひっ!」

「じゃあ、ほどほどにね」

アレルはキュルケとタバサに手をふり、部屋に戻った。

その途中、

「ぎゃあああああ

「いやあああああ

「うわあんんんん

「もっとおおおお

叫び声が聞こえてきた（最後の方は何か違ったが・・・）

翌日。

火の塔に吊るされたヴィリ工達が発見された。

皆、服やマントが鋭い何かで貫かれた痕や焦げたところがあったそう
うだ。

微熱VS雪風（後書き）

今回は、主人公があまり活躍しませんでした。

誤字脱字の指摘をお願いします。

急展開（前書き）

最新話です。

大学が忙しく、更新が難しくなってきました・・・
すこし、更新が遅くなるかもしれませんが・・・
申し訳ないです。

急展開

「くそ!!」

アレルは悪態をつく。

「無事でいてくれ!」

アレルからは膨大な魔力が溢れる。

その魔力に引き寄せられ、大量の精霊がアレルの周りに集まってきた。

「聖霊よ!みんなはどこにいる?」

『あっち』

『こっちだよ』

『このまままっすぐ』

『みんないるよ』

「ありがとう！頼むぞー！」

「ぐる」

アレルの頼みを聞き、風竜は翼をはためかせて指示された方角に飛んだ。

虚無の曜日を利用してアレルはアルビオンに来ている。

彼は久しぶりにアルビオン王国、サウスゴート領付近に来ている。

「すいませ〜ん。これをください」

今、ウエストウッド村にいるテファや子供達のためにいろいろな物を買っている。

「このぐらいでいいか」

アレルはテファ達に持っていくお土産を袋に詰めてウエストウッド村に向かった。

「みんな喜んでくれるかな？」

子供達には甘いお菓子とそれぞれが欲しがっていた物を買った。

アレルは村を出る前に今度来る時にお土産を持ってくるが、何が欲しいかをテファと子供達に聞いていた。

アレルが村にいない間、子供達の中で一番年長のジムには訓練用の木剣。

テファの手伝いをするサラには新しいエプロン。

本好きのマークには最近出たばかりの「イーヴァルディ」の本。

恥ずかしがりやのエリサには占いのカード。

E t c

子供達が欲しがっていた物を用意した。

次にアレルはテファのお土産を何にするかを考えていた。

彼女は自分はいらないから、子供達の喜ぶ物を買ってきてくださいと言われていた。

一応、お菓子をたくさん買ったが、アレルはテファに何かを贈りたかった。

「うん」

悩みながらいろいろな商店を覗いた。

そして、少し古びた店をアレルは見つけた。

看板から見て、装飾品の店のようだ。

「ここも見てみるか」

アレルはドアを開けて店の中に入った。

店の外観はあまり綺麗ではなかったが、店内はそれなりに掃除がされていた。

ざっと見た感じ、目を引くような装飾品はなかった。

「いらっしゃい」

女性の声が店の奥から聞こえてきた。

「あら、貴族様で。うちは貴族様のお目に適うような品はありませんよ」

店主は貴族のマントをつけたアレルを見て言った。

「まあ、見るだけ見てみるよ」

そう言って、アレルはじっくり装飾品を見る。

「うん」

顎に手をつけながらテファに似合いそうな装飾品を探す。

髪飾り・イヤリング・ペンダント・指輪などガラスケースの中の物を一通り見る。

「店主、あそこに置いてある装飾品も売り物か？」

ガラスケースに入れられていなく、乱雑に置かれている所を指差し尋ねる。

「ええ、しかし、平民向けの安物ですよ。貴族様が買われるような品ではありませんが——こちらの指輪などいかがですか？」

店主はそう言って、アレルにケース内の装飾品を勧める。

「いや、あつちの方をしてみるよ。ふゝむ・・・確かにデザインは普通だが・・・」

アレルは装飾品の中から指輪を1つ選びしげしげと見た。

彼は指輪から何かを感じ取った。

そこで、解析魔法をそれにかけた。

「（かすかに精霊の力を感じる）店主」

「はい？」

「これを製作した者は誰だ？」

「私の父です。あの、何かその指輪はおかしいでしょうか？」

店主は不安そうにアレルに聞く。

「いや、なかなか良い品と思ってな——その人には会えるだろうか？」

アレルは指輪の製作者に会ってみたくなった。

「店の裏の工房に籠っているので会えますよ。今呼んでくるので少しお待ちいただいてもよろしいでしょうか？」

「いや、私が直接行こう。私が言いだしたことなんだから、こちら

が行くのが筋だろう」

「はあ？」

店主は貴族らしからぬ、アレルの行動を疑問に思いながら、彼を工房まで案内した。

アレルが工房に入ると、かなり小柄の男が手作業で装飾品を製作していた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

工房の主は娘に連れられてきたアレルに驚いたが、すぐに見定め、ように彼のことを見た。

「ちよっとお父さん！失礼よ！！」

店主（工房の主の娘）は自分の父親に抗議した。

「黙っておれ……」

工房の主は娘を一喝した。

「……」

アレルは黙って工房の主の目を見ていた。

5分ぐらい時間が過ぎ、おもむろに工房の主がしゃべる。

「……エルフだな？」

「えっ？」

娘が驚く。

「いいえ、正確に言うとハーフエルフです。そして貴方はドワーフですね？」

「ほっ？よくわかったね」

「ええ、私の領にはドワーフ族の方達が何人もいますからね。しかし、初見で私の正体を見破るなんてすごいですね」

「何、君の周りにいる精霊から聞いたんだよ。しかし、四大精霊に愛されている者を見たのは初めてだ」

「まあ、皆、僕の友達ですからね」

精霊にも様々な種類がいる。

その中でも、系統魔法と同じように、『火』『風』『水』『土』の精霊達は精霊達の代表格で、それらの上位の位にいる精霊達のことを四大精霊と呼ぶ。

「ほう。その年で四大精霊と契約をしているのか。君は将来、偉大な使い手になるだろうね」

工房の主はアレルのことを褒める。

そして、互いの名を言う。

工房の主はフロドという名前らしい。

「それで、どのようなご用件で？」

「大切な人に贈る物を探しているのですが、何か良い品がないか探していたんですがなかなか見つからず、たまたまこの店で微弱な精霊の力を発する装飾品を見つけたので気になりましたね」

「ほう。ではこれなんかどうですか」

フロドさんは小箱をアレルに渡した。

小箱を開けると、中にはシンプルなデザインの指輪が二つ入っていた。

しかし、宝石をはめる台座はあるが肝心の宝石が入っていないかった。

「これは？」

アレルはフロドさんに尋ねる。

「これわね、『土』の精霊に材料になる鉱石を採ってきてもらって、『火』の精霊に溶かしてもらい、『風』の精霊に加工を手伝ってもらい、最後に『水』の精霊に磨いてもらった指輪だね。婚約指輪だ」

「婚約指輪……」

「そして、その宝石を填める台座が空なのは理由があるんだよ」

「それはいい……」

「その指輪は互いに自分の魔力を籠めた魔力石を填めた指輪を相手に渡すんだよ。そして、魔力でできた魔力石を指輪に填めると魔力を籠めた者の安否が分かるんだ。相手が無事であれば石は透き通っている。もし、相手の身に危険があるとき、その色は濁る」

「仮に・・・その相手が死んでしまったらどうなるのですか？」

「・・・宝石はただの石になる」

「他には？」

「魔力を籠める人の系統によって、他にも追加効果を付与することができる。それがなんなのかは人それぞれだから、実際にやってみないと分かん。どうする？買うかい？」

「ええ、買います」

アレルは手持ちのお金を全てフロドに渡した。

「おいおい、多くないか？」

「いえ、これだけ素晴らしい品なのですから・・・今、手持ちが

それしかないので……」

「いや、十分だよ」

アレルは指輪の入った小箱を受け取った。

「ありがとうございます。早速、今日渡します」

「その指輪を受け取るお前の相手はかなりの美人さんなんだろうな」

笑いながらフロドさんはアレルに言うてくる。

「お父さん！！貴族様にそんな口の利き方をするなんて！！」

フロドさんの娘（現店主）が父に怒る。

「はは、別に気にしませんから」

アレルも笑いながら言う。

「じゃあ、失礼します」

アレルは工房を出た。

「おう、また来いよ！」

フロドさんはアレルに手をふる。

「お父さん！！」

「痛い、痛い、勘弁してくれ。ちよつ、物を投げるのはやめてくれ！」

工房の中から破壊音とフロドさんの悲鳴が聞こえてくるが、アレルは店をですぐに走って、風竜の元に行ったので、気付かなかった。

場所：ウエストウッド村

「あれ？」

テファと別れた森の入口付近で竜から降りたアレル。

彼は、ウエストウッドの森に違和感を感じた。

「・・・森の様子がおかしい」

この時間帯は、鳥達の鳴き声が森中から聞こえ、精霊達が木々の間を飛びまわる。

「・・・何かあったな」

アレルは村へと続く道を走った。

「・・・ウソだろ」

そこに確かにあったはずの村が破壊されていた・・・

「・・・テファ！！みんな！！」

アレルは廃墟と化した村を探した。

しかし、村にはテファや子供達の姿はなかった・・・

「みんな・・・どこに行つたんだ？」

「・・・これは!」

廃墟の村を搜索していると、鎧の破片を見つけた。

それは、ロマリアの聖堂騎士隊が装備する鎧に酷似していた。

彼ら、ロマリアの聖堂騎士隊が装備する鎧は普通の鎧と少し違うところがある。

聖堂騎士達の魔法の行使の際の詠唱で讃美歌を歌うようにする特殊詠唱方法によるものがある。

複数の魔法を同時にかけること、通常より強力な鎧を作ることができる。

ロマリアの聖堂騎士達はこの鎧を常時装備している。

その鎧の破片が落ちている……

「……反教皇派か」

聖エイジス32世。

ヴィットーリオ・セレヴァレ。

20歳前後という異例の若さで教皇に選ばれる。

即位後は清貧を重んじ、貧民の救済と腐敗する神官や寺院組織の改革に力を注ぐ。

彼は身分の別なく柔らかい物腰で人に接することから、ロマリア市民の絶大な尊敬を集める。

その一方、改革を心よく思わない保守派の反発も強く、彼らからは揶揄を込めて「新教徒教皇」と呼ばれている。

アレルの両親、現ゲルマニア皇帝は、エルフである自分の妻とハーフェルフであるアレルをロマリアの異端審問にかけられないように、教皇に多額の援助をしている。

現に、教皇の直筆の免状がある。

そのことを知る者は限られている。

情報を知る者は少ないほうがいい……

しかし、それを完全に流出するのを防ぐのは難しい……

アレルは教皇にランカスター領に一部のロマリアの貧民を受け入れることと、食糧援助をすることを確約し、テファの分の免状を手に入れている。

自分と同じハーフエルフであるテファの身の安全を得るために……

しかし、そのことを現教皇の政策に反対である保守派の者がハーフエルフであるテファのことを知り、狙ったのであれば……

エルフに免状を渡した現教皇は当然、異端審問にかけられる。

その関係者達も……

「……………」

アレルの身体から魔力が溢れる。

「…………この地で眠る聖霊よ…………古の契約に従い…………
我前にその姿を表せ」

アレルの魔力を受けて、さっきまではいなかったはずの精霊達が集まりだした。

火の精霊

水の精霊

風の精霊

土の精霊

「やあ、すこし教えてほしいことがあるんだけど」

『『『『なにになに？』』』』』

「この村に住んでいた人はどこに行ったか知っているかい？」

『みたよ』

『森の向こうにいったよ』

『変な人がいたよ』

『いたのだ』

「そうか……君達はこの村に住んでいた女の子と契約をしていたかい？」

アレルは自衛のためにテファに精霊魔法を少し教えていた。

『『『『したよ』』』』』

「彼女は、君達の力を借りなかったのかい？」

『『『『したよ、でも、すぐ契約は切れちゃった』』』』』

精霊達はアレルに答える。

「……………何故だい？」

『一人が変な剣を使っただよ』

『その剣がね』

『契約を切っちゃの』

『の』

「……………（精霊との契約をうち消す剣？そんなものがあるのか？）」

アレルは今までそのような剣があるとは聞いたことがない。

「ありがとう。彼女達はどこに連れてかれたのか教えてほしいんだけど」

『『『あつち』』』

精霊達が道を示した。

「ありがとう」

精霊に礼を言つて、風竜を呼んだ。

アレルは子供達とテファのために買った物を風竜に積んだ。

「向こうの方角。全速力で飛んでくれ」

「くる」

アレルの指示を聞いて、風竜は大空に向けてその翼を広げ飛びたった。

急展開（後書き）

いかがでしょ？原作ブレイク！

誤字・脱字の指摘をお願いします。

ロマリアの闇（前書き）

大学がめっちゃくちゃいそがいそがい……

更新が遅くなるかもしれません……すみません。

ロマリアの闇

アルビオン王国から離れ、ロマリアに続く街道を進む一団がいた。

大型の馬車が一台に、馬に乗った騎士達が護衛をしていた。

その一団はかなりのスピードでロマリアに向かっていた。

途中の関所は男の持つ、ロマリア司教の発行した通行書で検査なしで通過できた。

保守派のロマリア聖堂騎士 side

「しかし、隊長、その剣はすごいですね」

隊員の一人が、隊長らしき男に声をかける。

「ああ、こいつさえあれば、エルフなんて恐れる必要はない」

そう言っつて、その男は自身の腰に下げている剣を撫でた。

この剣は保守派の幹部の者から貰った。

数日前。

ロマリア郊外の建物。

そこにはかつてロマリア宗教庁の建物があった。

ロマリアの中心地から距離があるのと、建物自体が古くなったためロマリアの首都に移された。

男は保守派の幹部にこの捨てられた建物に来るように言われた。

そこで、ロマリアで反教皇派と言われる、保守派の幹部に会った。

そして、剣を渡された。

「何のですか？この剣は？」

両刃の長剣をしげしげと見ながら、目の前の男に尋ねる。

『ロマリア宗教庁に古くからある剣らしい』

「古くからというと？」

『約6000年前と、研究者たちは言っている』

「なっ！？」

男は目の前の剣が、それほど古い時代からあるという話が信じられなかった。

錆が全くなく、刃こぼれ一つしていない。

何の変哲もない剣。

『注意しえくれたまえ、その剣はとても貴重な物らしい。それを研究している者達が言うにはその剣には先住魔法を打ち消す力があるらしい』

「先住魔法を!？」

それが本当なら聖戦の際にエルフに対して有効な物となる。

『注意してくれたまえ。その剣はその一本しかない』

「なぜこれしかないのですか？」

それほどすごい剣であるなら量産すればいいのと思った男は尋ねた。

『確かにその剣を量産できれば、エルフ達から聖地を取り返せるだろう・・・しかし、その剣がどんな素材で出来ていて、なぜ先住魔法を打ち消せるか、それは長年研究して分からのだよ』

「そのような貴重なものを何故私に？」

『この剣をもって、アルビオンのある村にいるエルフを捕らえてきてもらいたい』

「エルフですか？」

『ああ、生きたままロマリアに連れてきてもらいたい』

「何故です？」

エルフを殺せと言われるのなら分かるが、何故わざわざ、生きたまま連れてこなければならぬのか男には理解できなかった。

『なに、そのエルフが混じり者らしくてな・・・是非サンプルに欲しいのだよ。勿論、任務を受けるのも受けないのも君の自由だ』

「」命令とあれば・・・」

男には任務を拒否するようなことは出来ない。

目の前の男は保守派の中でもかなりの地位にいる。

任務を拒否すれば、何をされるかわからない。

『そうか！よし、任務の詳細を教えよう』

『はっ！』

そして、男は任務を遂行した。

男は自分の隊の部下を数名引き連れアルビオンに来た。

部下に複数詠唱魔法（讚美歌のように歌いながら数名が同じ魔法を行使する）を村の中心に叩き込んだ。

それから、村に火を放った。

小屋の中から帽子をかぶった少女と子供達が出てきた。

男達は彼女と子供達を包囲した。

少女は太ももに括りつけていた杖を抜くが、部下の一人が風魔法で杖が吹き飛ばす。

この時、少女の被っていた帽子も一緒に吹き飛び、エルフ特有の長く尖った耳が見えた。

エルフの少女は子供達の前に立ち、祈るように何か呟く。

すると、周囲の空気が変わった。

エルフの少女と子供達を守るように、風が吹き荒れる。

男達に向かって、石が飛んでくる。

男は渡されていた、剣を抜いて地面に突き刺した。

するとエルフの少女と子供達を守るように吹き荒れていた風が止み、男達に向かって飛んできた石が地面に落ちた。

エルフの少女は困惑した。

男は地面に刺した剣を抜き、エルフの少女と子供達を拘束した。

エルフの少女は子供たちを守ろうと必死に抵抗したが、男が剣を子供に向けると大人しくなった。

彼らを馬車に乗せて、村を出発した。

アルビオンは浮遊大陸のため、その外縁部に来るとそこには空しかない。

男達は任務の性質上、港を使うわけにはいかなかった。

そこで馬車に風石を設置して、重量を軽くし、風魔法で下の地面に降りた。

馬も風魔法で降ろした。

そして、ロマリアに向かった。

「隊長、ロマリアの領土に入りました！」

部下の一人が報告してきた。

「ああ・・・しかし、4日でよくアルビオンからロマリアに戻って来れたな」

船が使えないので、ロマリアに戻るのにかなりの日数がかかると考えていたが、途中、馬車を引く馬や自分達が乗る馬を何度か代えることで、ロマリアに僅かな日数で戻ることができた。

そして・・・

「任務完了しました」

『ご苦労だったね』

男にエルフの少女を引き渡した。

「この子供達はどうしますか？」

捕獲対象と一緒に捕まえた、子供達の処遇について尋ねる。

騒がないように、猿轡をかませて拘束しているが、必死に手足をバツつかせて抵抗している子供達。

『なに、こちらで引き取ろう……。ちよつと実験材料が足りなかつたのでな（にやり）』

男は笑いながら、子供達を見る。

「……！」

子供達は恐怖し、エルフの少女の傍による。

彼女は子供達を守るように前に出る。

『連れてゆけ』

「はっ！」

この建物を警備している者達が彼らを建物内に連れていく。

『さて、その剣を返してもらおうか』

男は無言で剣を渡す。

『ご苦労・・・』

そう言って、男は剣を受け取る。

『君達に始祖の祝福があらんことを』

そう言って、男は建物内に入っていった。

「・・・引き上げるぞ」

男は部下に指示を出し、自分達の本来の所属する地に向かって馬を走らせた。

「隊長。あの子達はどうなるのですかね？」

部下の一人が話しかけてきた。

「さあな・・・」

男はそう返すが、彼女達がどうなるか想像できた。

エルフの少女は聖地奪還のために、エルフ達の弱点を探すための研究。

子供達は何らかの人体実験の被験者にされるだろう・・・

（気分の悪い任務だった・・・しかし、もう終わったんだ・・・）

男は内心ほっとしていた。

これで、任務は終わった。

そして、もう自分達は関係ない。

そう馬上で思いながら、街道を走る。

そして、ロマリアの首都に入る直前の関所に着いた。

男は自分の所属する隊と身分証を提示した。

関所の警備隊員はしばらく、同僚と話した後、男達に確認することがあるのでしばらく待っていてほしいと言い、関所の責任者の元に走っていった。

「何か問題でもあったのですかね？」

部下が話しかけてきた。

「さあな」

自分達が提示した身分証はロマリア聖堂騎士団が発行する正式なものである。

何も問題は無いはず……だった。

先ほど走っていった隊員が関所の責任者らしき者を連れて戻ってきた。

「失礼します。この関所の責任者です。申し訳ありませんが、貴方達をここより先に通すことができません」

「なに?! どういうことだ？」

「誠に申し訳ありません。貴方達を国家反逆罪で捕らえよと命令をされています。武装の解除を」

「ふざけるな！！我々は拘束されるような事はしていない！！」

部下の一人が怒りの声を上げる。

「貴方達は許可もなく所属する隊を離れ、他国に密入国し、その国の住民を攫い、違法研究をしている者達に引き渡したということで、ロマリア聖堂騎士団から除名されました」

「なっ？！そんなわけないだろう！私は騎士団長殿に休暇の申請をしたぞ！」

秘密任務を行うため、男は自分の上司である騎士団長に部下数名と共に休暇の申請をした。

任務の性質上、公に出来ないのも、休暇という形になっている。

それに、保守派の幹部が、根回しをしているという話だった。

「我々は貴方達を拘束せよと命令されているだけなので、そのようなことを言われても困ります」

「納得できるか！！騎士団長殿に取り次いでくれ！」

「それは出来ません。貴方達は犯罪者だ。直ちに武装解除をして、こちらの指示に従ってください。指示に従わないなら・・・」

関所の責任者が手をあげる。

すると、男達の周りを武装した警備隊員が囲む。

「無理やりにも、拘束させていただく！」

「くっ」

男は悪態をつく。

「た、隊長」

部下が話しかけてくる。

「・・・喰らえ！」

男が風魔法で周囲を囲んでいる者を吹き飛ばす。

「お前ら！全速力で来た道を戻れ！！」

男は馬を走らせながら言う。

「隊長どうゆうことですか？」

「俺にも分からん・・・」

「・・・我々はどうすればいいのですか？」

「・・・とにかく、俺について来い」

男は自分の所に今回の任務を持ちこんできた男がいる元宗教庁のある建物に向かうことにした。

そこに行けば、保守派の幹部が何かを知っているはず・・・

とにかく、今はそれしか思いつかない。

男達は馬を走らせた。

そして、丘を越えれば目的地の建物がある・・・

「・・・どうゆうことだ？」

目の前にはただ、荒野が広がっているだけだった。

任務を完了した時、ここには確かに建物があった・・・

「」「」「・・・」「」「」

男達は目の前の光景にただ呆然としていた。

「お前らか、テファ達を攫ったのは……」

「……!?」

心の底まで冷えてしまいそうなほど怒気が籠められた声が響いた。

男達は周囲を警戒する。

しかし、声の主は見つからない。

「殺しはしない……テファが嫌がるからな……しかし……ただですむと思うなよ!!」

「どこにいる!姿を表せ!!」

「……人は目の前に強大な存在があるとき、恐怖で無意識にそのものの姿を見えなくするらしい……そうしないと、正気を保てないからだそうだ……」

男達の近くに、その声の主は確かにいる。

「……『ナイトメア』……悪夢を見るがいい……」

そして、男達の意識は闇に沈んでいった……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2780n/>

ハーフェルフの皇太子～ただ一人のために～

2010年10月9日13時37分発行